

み取つた爲に、その主婦に泥棒呼ばりまでされて、わざ／＼あやまりに行つた事がある。そんな事から彼女は此の町に住む人は、皆（おつかねえ人）だと思ひ込んでゐる。はじめの中は、道で逢ふ人毎に、田舎風の丁寧な挨拶をして笑はれたりしたが、今は唯遠くの方からおど／＼とした心持で眺めてゐる。おつかねえ人、おつかねえ處——婆さんは家のまはりの二三町の範圍より外には滅多に出て行つた事が無かつた。而して毎日、町の工場に通ふ平さんや、町に行つてゐる孫娘の身が案じられてならなかつた。平さんは折々呑みつけない酒など呑んで、赤い顔をして夜遅く歸つて来る事があつた。近頃は前のやうにやさしくもないし、どこかに暴々しいところが出来て、漸次人が變つて行くやうに見える。

ひとりぼつちになつた婆さんには、金三だけが話相手で、よく田舎の話をした。

「金三」 お前は田舎へ歸り度く無えか？」

「うゝ。」金三は先刻母親に叱られた涙の痕を眼の周圍につけて、出窓の下の雨垂の溝の縁に蹲まつてブリキの罐に小砂利をすくひ入れてゐる。未だ仲好く出来るやうな遊び相手が無いので、金三もいつも一人で淋しさうにしてゐた。淡々しい秋の日さしが、老婆と孫との淋しい二つの影を長く地上に引いた。

「歸り度く無えかと云ふんだよ。田舎へ。」

「歸り度えー」金三が然う云ふ時、婆さんは心強かつた。金三の答は氣紛れであつた。（歸り度え）と云つたり（歸りたか無えやー）と云つたり——併し、今は、をぢさんの訪問が金三の心に、失はれかけてゐた田舎のおもひで蘇らしてゐる。

「もうお祭りが来る。」婆さんは金三の心を自分と一緒に田舎に連れて行く爲かのやうに斯う獨言つた。

「お祭りに行き度いな。藪下のをぢさんが來うツて云つたあー」金三は罐を投げ捨て、ふと立上つた。田舎の村の秋の祭禮の記憶がなつかしく彼の心に浮んで來た。狭霧立つた夕暮の門の茶の木垣に懸け連ねた繪行燈や、玉蜀黍の葉の靡く畑道に赤い提灯の灯を亂して揉んでゆく神輿の行列や、鎮守様の庭の棧敷の神樂や、それから仲好しだつた友ちゃんや健ちゃんやの嬉しさうな顔までが續いて眼に浮んで來る。

「お祭りに行き度いな。」金三は心からの熱望で斯う云つた。それから續いて、金三は、あの遠い田舎に残して來た様々な楽しい遊び、自由な恣な山や野の遊びを思ひ出した。

「もう茶菓が赤くなる時分だな。おばあさんー」……裏の山の或る處に、茶菓の一株を發見して、

自分のと決めて誰にも教へ無いで居たが、あの茶菓の實ももう眞赤に色づいてゐるだらう——。金三は灌木の繁みの中に、仄かに赤い實をつけてゐる茶菓の木を想像して、たまたま田舎が、山が戀しくなつて來た。

「近いといふけれどな。」

「金は、ほんとに歸り度えかい？」

「歸り度え！」

「おばあさんも歸り度えぞい、連れて歸つて呉れる！ 早く大きくなつて。」

婆さんは思ひつめたやうに斯う云つた。

町へ行つてゐるお捨は時々歸つて來た。心も體も都會の刺戟にその目覺を早められて、彼女は暫くの間に見違へるやうな娘となつた。大きな廂髪に結つて、はでな帯をしめて、眞白に白粉を塗つた姿は近所の人達の眼を惹いた。

「お捨かい。おりやまあ誰かと思つた。」婆さんは驚きの聲をあげて、それでも嬉しさうに傍へ寄ると、お捨は、鼻柱のところへこましくやくれた皺を寄せて、

「（おりやまあ）だつて！」と相變らずの言葉を囁つた。おつとりとした靜かな田舎娘の特徴はすつ

かり失はれて、その眼は始終何物をか求めて、そは、と動いてゐる。婆さんとは反對に著しく多辯になつた彼女は、滑かな東京言葉を自由に驅使しながら、快活なはしやいだ調子で母親と語つた。

婆さんは、驚嘆に似た心持で、遠くの方からまじくと打戾りながら、お捨もすつかり町の人になつて了つた！ と思ふ。田舎に居た時分には、お婆さんくと彼様に迄懐き親んでゐたのに、と思ふと云ひ様も無く心細くなる。田舎に居る中は誰もがこんなに迄自分を除物にしはしなかつたのに——。

「町場の生活ぢや己がやうな者は邪魔になる許だでな。己だけはどうかして田舎へ歸して貰へ度え。」

婆さんは折々こんな事を云出したが、併し、そんな事が出来るもので無い事は自分でも承知して居た。而して、矢張お捨や金三の事が心配になつて堪らないのであつた。幾度も躊躇した上遠慮しいくお捨の傍によつて耳元に口を押附けるやうにして、くどくどものを云ひかける。

「氣をつけろよ。町場の人はおつかねえぞい。己やお前の事が心配で——」

「まあいやだ！ 先刻からお婆さんが何を獨言を云つてゐるのかと思つたら、私に云つてゐるんだよ。（おつかねえぞよ）（おつかねえぞよ）だつて——」お捨は大きな聲を立て、笑つた。お由も笑つ

た。

「おばあさん、そんな心配しなくても宜いんだよ。」すつかり娘に感心し切つてゐる母は、娘が東京の真中に出ても立派に一人前で通つて行ける事に誇りを以て、かう婆さんに言ひふくめる。而してお捨を顧みて、

「おばあさん、近頃へんに遷けて了つたんだよ。」

弾きとばれたやうに遠退いた婆さんは、悲しさうな眼附をして黙り込む。而して心の中で、

「何がぼけてゐるもんかな。」と呟いた。

お捨は淋しい室を笑ひ聲で充たして、腐れ切つた母親の心持に、蘇生を與へて、夕方近くなる
と歸つてゆく。婆さんは子負紐を締めなほして續いて表に出た。

「さあ、金三、ねえやを其處まで送つて行くべえ。」

「いゝわよ。お婆さんー」

お捨は迷惑さうに云つた。こんな田舎つべい（彼女はもう此の言葉を憚り氣も無く口にする事が出来た）のきたない婆さんと一緒に通りを歩いて人に見られるのが恥づかしいのであつた。

「此間な、藪下のをぢさんが來てな。」婆さんはお捨の肩に摺り寄るやうにして話しかける。「お前に

も逢つて行き度えツてな……。」

お捨は併し耳にとめて聞きもしない。袂を振りくく、故意に婆さんを遅れさせようとするやうに買立の塗下駄の足を早める。

轟と鳴る電車の音が、眞黒なもや／＼としたものになつて婆さんの眼の前を暗くした。婆さんは
共同便所の蔭に小さく身を固めてぢつと息をつめて力むやうにして、お捨が電車で運び去られるま
で見送つてゐた。

「あゝ、ねえやは行つて了つた！」

婆さんは金三を顧みて溜息をする。

こゝは小高い臺地になつてゐるので、電車の斜めに降りてゆくのが、かなり遠くまで見えた。而して眼の前をちら／＼と絶間無く往來する人や車の流れが、きら／＼と夕日に光る線路に添うて、そこから何處迄もと續いて居る。空ツ風が黄色い埃を捲き立て、看板の彩色や電柱のきらめきや、人々の忙しく動く姿やを混沌とした濁りの渦を卷く。屋根々々の上を掩うて一帯にもや／＼と濁つた空が涯りもなく續いて、そこに廣い／＼人間の海、逆巻き波打つ人間の海のある事を思はせる。電車の音、車の音、人々の叫び、笑ひ、罵る聲。耳近いそれ等の雑音を押包んで一種の大きな鈍い

どよみが地響をうつつて聞えて来る。婆さんの衰へ弱つた感覚は、それ等の目まぐるしい色彩や音響の爲にすつかり掻き亂されて、次第に何か大きな怖ろしい力に捲き込まれて行くやうな、大地が足下からぐら／＼と崩れて了ふやうな心地になるのであつた。婆さんは足もとに眼を落して、「おつかねえー」と例の口癖を繰返したが、「お捨よう——」とそつと聲を出して小さく呼んで見た。闇の夜に迷子を探す時のやうな、恐怖と疑惑とに充ちた震へ聲で。

「おつかねえ事だ。——金三歸るべ。」

金三は、田舎の子供のよくするやうに、両手を後頭部に組み合せて、ぼんやりと電車の行つた方を眺めてゐる。

「さあ、歸るべ。」

「あゝ。金三はのろ／＼と歩き出す。

「ぼんに、おつかねえ處たぞ——金三、お前は田舎に歸り度く無えかや？」婆さんは又夫を繰返した。

「歸り度く無えやい！」金三は亂暴な調子で、もうき／＼飽きた此の間を撥ね返した。「己も、もうちき姉さんの行つてるやうなところへ行くんだ。電車に乗つて。」

金三もこゝより向うへは殆んど行つた事が無かつた。この涯りも無く廣い町——町の眞中に行つて見度い、そこにはどんなに澤山の素晴らしいものがあるだらう？ お伽噺の妖精郷のやうに、輝かしくも楽しくも想像される未知の世界に、金三は活潑な少年の空想を馳せてゐるのだ。會て三度程電車に乗つて浅草へ遊びに行つた事がある。その時の記憶を夢のやうに呼び起して、勇敢なる冒險者のやうに町の眞中に歸つて行つた姉を羨ましいと思ふのである。

「さうかい。お前はもう田舎へ歸り度く無えかい？」

「田舎なんぞ、歸り度えもんか！」

金三は、來かゝつた馬力車の先を切つて、横飛びに駆け出した。

小き謀叛人

(八年三月作)

三吉は、壁一重隣の牛部屋で牛がごとくと壁を鳴らす音で、眼を覚ました。その刹那に「昨夕かひばをやるのを忘れたつけ。」とちらとさう思つたが、「今日は祭りだぞ。」といふ考へが、すぐに彼の意識の全部を占領して了つた。

牛は、ういと小さく唸つたり、敷藁をこそくと動かしたりして居たが、間もなく静かになつた。しかし、三吉はもう眠る事が出来なくなつた。

未だ暗いが、もう明け方の近い事は、向ふの窓のあたりが青白い薄明りでぼかされて居るので知られた。昨夕寝る時にも、一眠りして小便に起きた時にも、空には星が降るやうであつた。「xの八幡様に降りはない。」と昔から云はれて居る通り、今日も上天氣に疑ひ無かつた。三吉は、もう冴えきつて了つた大きな眼をばちくりさせて、その窓際の薄明りを見つめ乍ら、今日といふ日のもつて来る種々の楽しさを想ひ描いた。それからそれへと、想像が展べられて行くにつれて、仰向に寝たその胸が、満潮の海のやうに、次第々々にふくれあがつて来るかと思はれた。その楽しさの想像に裏書するやうに、

「今日はお祭りだぞ。」

と、三吉は時々心に叫んで見たが、小さな身内に漲る喜びは何時の間にか一つのリズムをなして

蒲團の下の膝小僧を小躍りさせはじめた。

「今日はお祭りだ、お祭りだ、お祭りだ、お祭りだ……。」

どこかで、幽かに一番鶏が鳴いた。それに應じて、もう一つの聲が、やゝ間近に聞えた。と、三吉の寝て居るこの納屋の東廂のあたりでも、うちの牝鶏が、こけこつこうと高く鳴いた。牛部屋の方でも、またごとくとごとくがはじまつた。三吉も、もうちつと寝て居る事が出来ないやうな気がして来た。——窓の隙間からの薄明りは、その壁際の土間に置かれた俵や臼の輪廓をぼんやりと照し浮べて居る。

「もう眼を覚ましてるな。未だ早えぞ。早過ぎるぞ。」

隣に寝てゐた五平爺さんは、此時、寝返りをして、寝惚け聲で斯う云つたが、ぼりくと身體の何處かを掻く音をさせたと思ふと、「昨晚、飲み過ぎたもんで……うむ、うむ。」と云つて、そのまゝすうくと眠り入つて了つた。

爺さんは、昨夜新屋で振舞はれたとかで、ぶんと酒の匂ひをさせて晩く歸つて来たが、だらしなく寢床の上にひつくりかへると、舌の廻らない聲でいつまでもくと三吉にはなしかけて居た。

「明日は祭りだな。嬉しいかんべ。嬉しいなあたり前だ。この年をしてもな……この年になつた俺でせえ、祭りといふと、何だか斯うぢつとして居れ無えやうな氣がするからな。……俺あ、今年六十三になるが、一年だつて、この村の祭りをしねえ事あ無かつたぞ。今年はこれで、六十三度目のおまつりだ。有難え、産土様あ有難え、今年もかうして、相變らず丈夫でな……。だが、俺も、もうあとせいぜい五六べんかな、此のお祭りをするの……。いや、二三べんかな……。いや、そんな事を云つてもうこれつきりかも知れ無え。ふんとに明日をも知れ無え生命だによ。……三吉。お前なんざあ楽しみだな、お祭りの面白くなるのもこれからだて。もう五六年たつて見ろ、それ、娘つ子といふものが目について來らあ。一晚のうちに一人も二人も女が出來る……。こんな面白え事あ無えぞ。……お前の祖父さんの源十たあ、俺あいつも相棒でな、祭りの晩といふと、一晚中村の隅から隅まで、娘つ子を追蒐け廻したものだつけ……。いや、これでなか／＼色男だつたものだぞ。」

三吉は、昨夜うと／＼とした耳にこんな言葉を聴き乍ら寝た事を想ひ出した。爺さんは、祭りの面白くなるのはこれからだといふが、これから無くても、今でも、祭りほど面白いものは凡そ世の中に無いと三吉は思つた。「娘つ子」の事などは、勿論、三吉にとつては全く未知の世界のものでそんな事はどうでもよかつた。一年にたつた一度しか來ない村祭りの、三日のうちでも殊に大切な

のは今日の一日で、此の一日のうちには面白いもの楽しい事が一ぱいに押しつめてあつた。鎮守の森では二十五座の神樂があつた。近村の若者達の力を競ふ飛入御免の草相撲があつた。夕方から夜にかけては、この近在に類の無いほど大きな神輿が、部落から部落へと渡御する。村の子供達は、手に／＼提灯や高燈を振翳して、口々に喚きながら、そのあとに、長い、輝かしい光の波となつて渦巻き亂れながら續いて行く。今年は、しかし、自分はその仲間にはひれないと思つて、三吉は淋しい氣がした。その代り、と考へる。——村の中心となつてゐるこの町（もう廢れ果て、町とは云へないやうになつて居るが）には、村の人々の大半が集まつて來て夜の賑ひは明け方までも續く。八岐の大蛇に躍りかゝる日本武尊の燦やかな剣と衣裳とを夜天に高く揺らめかした山車は、赤い提灯で縁どられた屋臺の上に、笛と、太鼓と、潮吹きや般若の踊りとを載せ、人波の中を押しわけて町を上下にゆらりと練つて行く。道の兩側には、食物その他の露店がすらりと續いて、その中には、見世物や覗き機關やがある。大きな刀を振舞はして藥を賣る、あの面白い手品師は、今年もまた來るに違ひ無い——。

「お祭りだ、お祭りだ、お祭りだ……。」

三吉の胸は、考へた丈でも、躍り出さずにはゐない。本當に祭りほどいゝものはない。どこへ行

つても楽しい事がある。どこへ行つても面白いものがある。而して、それ等のすべてを包んで、何とは無しに人を有頂天にするやうな、あらゆるものはしやぎ立たせるやうな、平素とはすつかりと違つた楽しい賑やかな空気が、どこにでも、たとへば、飯を食ふ茶碗の中にでも漲りわたつて居る。而して、そこへ持つて来て、仕立下しの晴衣と白い銀貨のいくつかを入られた墓口と——。

こゝで、三吉の心持が、一寸つまづいた。——しかし、まだ自分には、その仕立下しの晴衣も與へられてゐなければ、その白い銀貨のいくつかをも與へられて居ないといふ事を、ふと思ひ出したのである。

だが、今朝起きれば、そこにもうそれが待つて居るに違ひ無い。而して、朝飯を喰べると直ぐに飛び出す。先づ、自宅に歸つて、隣の吉公を誘ひ出して、それから……。

一寸心を掠めた陰影は直ぐ消えて了つた。再び、今日の楽しさの想像の中に恍惚としはじめた三吉は、ふと枕から頭を擡げて耳を澄ました。やがて、むつくりと起きかへつた。ドドン、ドドン、ドドン——。

それは鎮守の森で打ち鳴らす太鼓の音に違ひ無かつた。鈍い、重い、單調なその音は、その中に湧き立つやうな喜びを籠めて、しかしそれを強ひて抑へつけて居るやうな、もだ／＼しく心を咬る

響を以て、三吉の心に響いて來た。もう、窓や板戸の隙から明るい朝の光線が幾筋もさし込んで居た。三吉は堪らなくなつて飛び起きた。而して、兩手を伸ばして思ひ切り胸を反らして、

「今日は祭りだぞ。」

と、もう一つ大きく心に叫んだ。而して、上り口の板戸に飛びついて、満身の力を籠めて、がらりとそれを引き開けた。

納屋から飛び出して、母屋の裏手の井戸の側に、顔洗ひに行くと、若旦那が齒楊子を啣へてそこに立つてゐた。三吉は、おふくろさま同様、この若主人を好いてゐなかつたが、今朝は、その小さな身體が喜びで一ぱいになつて、何人にも笑ひかけたいやうな上機嫌だつたので、

「お早う御座います。」と、いきなり聲を掛けた。すると、若旦那はそれを彈き返すやうに、

「三公、昨夕牛にかひばを忘れたな。早く行つてやつて來う！ あんなに、鳴いてるぢや無えか。」

思ひ掛けない小言に、上機嫌の端を折られた三吉は、ぼかんとした顔附になつて、すぐ疳癩筋の立つ若旦那の額のところを上目づかひの眼を投じた。

「何をぼんやりしてゐるんだい？ 早く呉れて來う！」

短氣な若旦那は嘯みつくやうに怒鳴つて、べつと齒磨の唾を吐き出した。

三吉は、むつとしたが、のそくと牛部屋の方に引返して行つた。心の中で、「何だい？ お祭りだと云ふのに、朝つばらから……。」と呟き乍ら——。

三吉の朝の機嫌は、それで憂無しにされかゝつたが、それでも豫期した通りに、朝飯が済むと直ぐ、おしきせと小遣ひと、而して今日のお暇とが^{ひま}出れば何の事は無い筈であつた。ところが、朝飯前のうちに、三吉はおふくろさまに呼びつけられた。

「三吉、御苦勞だがな、朝飯が済んだら、あの坂下の水車まで一走り行つて来て呉れろ。饅頭を拵へる粉が足りさうもないから——。」

おふくろさまは例の落着き拂つた言葉附で、かう三吉に云ひつけた。三吉は、眼を睜つて、口を開けて、呆れたやうな顔をして、おふくろさまをぢつと見た。言ふ事を間違へて居るのでは無いかと思つた。しかし、おふくろさまは平氣の平左で巾着の口のやうな唇にうまさうな朝の煙草を吸つてゐた。

三吉は、こみあげて来る腹立たしさと悲しさとで、眼先が暗くなるやうな氣がした。しかし、一ばん怖いおふくろさまの命令は背くわけには行かなかつた。朝食を済ますと納屋へ戻つて古股引を穿いた。而してやせうま(背負ひ子)の紐を肩にかけて、懶い歩調で出かけた。出かける時、その序

にこれを届けて来いと云つて、一通の手紙を若旦那から渡されたが、その届け先は水車屋からまた五六町も先の家であつた。行つて歸るとどうしても、午近くなつて了ふ。
「ひどいや、あんまりひどいや！」

かう呟き乍ら、三吉は實際泣き度いやうな心持で裏の畑の小徑傳ひに、水車屋へと急いだ。鎮守の森からの太鼓の音は、益々調子づいたやうにしきりなしに響いて來た。

「やあ、三公、使ひかい？」

丘の上り口のところで、紋附の羽織を着込んで祭世話人のしるしのついた提灯の柄をわきざしのやうにさした、近所のをちさんに行き逢つた。

「あゝ、水車場まで行つて來るんだ。」と、三吉は訴へるやうな心持を籠めてそれに答へたが、その聲と一緒に、つい、涙が出さうになつて來た。併し、をちさんは別に氣に留める様子もなく、

「早く行つて來う！ お神樂あ、今日は早く始まるといふぞ。」と怒鳴つて行き過ぎた。

あゝして皆、もう出かけて行く。今日こんな風に、野良着なんぞで出て用をしてるもんは、村中尋ねたつて、俺より外無いだらう——などと考へる。

「ひどいや！ ひどいや！ あんまりひどいや。」

彼は、脊中のやせうまを抛り出して、了ひ度くなつた。本當ならば、昨日だつて午からは休ませていゝ筈だ、それを日一ばい働かされて、今日迄も斯うして用をさせられる。そんな法は無い——と三吉は考へる。正月の時だつて、ろく／＼遊ばせては呉れなかつたし、何時だつてさうだ。而しておふくろさまも、若旦那も、揃ひも揃つて八釜し屋で、がみ／＼と人を叱るのを商賣にして居る。奉公するのは仕方が無いが、こんなひどい家は可厭だ。——これは三吉のいつも思ふ事であるが、今の今、その不平は頂點にあつた。「もう、あんな家に居るもんか、おん出て了ふ！」と、ひく／＼と、そをかきさうな口元に力を入れて、かう口に出して言つて見た。

だが、若し逃げ歸りでもしたら、どんなに親父に叱られるか知れない、と思ふと、三吉の心は悲しく萎れた。實は今年の春、一度逃げ歸つた事があつた。すると親父は、小言を云ふよりも先に吃驚して了つて、一方ならぬ惶て方で、引摺るやうにおふくろさまの前に件れ戻つて、「どうも此奴、とんだ不了簡を起しまして、どうも何ともはや。」と、何度も何度もべこ／＼と頭を下げた。而して「あんでも御主人様を大事にして、おいひつけに背いちやならねえ。御主人様の爲なら、命を捨て、もいゝだ、と毎々申し聞かせて居るんですが、どうも飛んだ不了簡の奴で、……もうこれから決してこんな事はしねえやうに、私もみつしり言つとききましたから……これも、しん

から……後悔してますで……どうぞお腹も立ちませうが……。」などと、へどもどとしながら、自分で勝手の事を云つて詫びた。すると、おふくろさまは、あの白い眼でじろ／＼と此方を見乍ら、「どうも此の子は、すこし別だよ。お前も、お前の親父の源十も、ふんとに素直で宜かつたがな——」などと言つた。で、結局、おふくろさまはじめ、うちぢうの人にあやまらせて、居度くもないうちに、勘辨して置いて貰ふ事になつたのだが、あの時位情無い事は無かつた。平常自分をいぢめてばかり居る下女のお玉のやつにまで、いろ／＼お世辭を言つたりなどして——あの時の、自分の父親の意氣地無い様子ほど、心外なものは無かつた。うちではあんなに威張つて居る癖に、おふくろさまの前に出ると、へいこら、へいこら、まるきり頭が上らないのだ。一體あんな馬鹿々々しい事があるだらうか。此間一寸家へ寄つた時にも、「世間並の御主人様ではない、三代續いた御主人様だから。」なんて言つてきかせたけれど、三代だらうが、四代だらうが、自分の知つた事ぢや無いんだ。親父があんまりへいこらするから、俺までが、こんなにひどい目にこきつかはれるんだ。遊び日だつてろくに遊ばせもしないで、こんな百姓奉公は本當につまらねえ——。

こんな事を考へて居るうちに、しかし、水車場はもうすぐ近くになつた。三吉は、勢づいて駆け出した。

水車場では二十分ばかり待たされた。此の一年に一度しか無い大事な日が、かうして居るうちに刻々に耗り減らされて了ふのだと思ふと、三吉は氣が氣でなかつた。

すつくの囊に入れた麥粉は、容積の割にはずる分重かつたが、一刻も早く歸つて——と思ふ心の勇みから、歸途の足は軽く動いた。丘を一つ越えたところで丁度半分途だ。さすがに息が切れるので、草いきれのする堤に背をもたせて、額ぬかの汗を掌で拭きながら一休みしてゐると、鎮守の森の太鼓は、殊更に人の心をそゝらうとでもするやうに、益々盛に響いて来る。そこにはもう、お神樂の用意も、御輿の支度もすつかり出来てゐるに違ひ無い、而して、誰も彼も皆集まつて、夢中になつて歎びの叫びを擧げてゐる様が、三吉には鮮かに想像された。

三吉は、衝き動かされたやうに立ちあがつた。而して二足三足歩き出すと、足下にちらりと、白いものが落ちた。何だらう？ と、腰をかゞめると同時に、三吉は、「あー」と聲を擧げた。失敗つた！ 忘れた！——それは、届けて来るやうにと命じられた手紙であつた。

三吉は拾ひ上げたその手紙を、恨めしさうに見つめたまゝ、しばらく棒立に立つてゐた。もう半分道も来たのに、もう一度引返さなければならぬ——と思ふと、自分の不覺が恨めしくもあつたが、それよりもこんな用事までもいひつけた主人に腹が立つた。而して、その恨めしさ、腹立たし

さをひつくるめて、或る情無さなさけなの感じが、しみ／＼とその小さい胸の底からこみあげて来た。三吉は、もう泣き出してさうなつた。實際、暑苦しさあつたに赤ばんだ頬がひく／＼とひきつれて、その眼の眼頭のところに涙が滲み出して来た。

三吉は思ひあきらめたやうに、その手紙を懐に入れて、又、もと来た方へと歩き出した。が、十歩ばかり行くとばかりと立ち止まつた。そして一寸そのまゝ、衝立つて居たが、その小さい身體全體に、或るきつぱりとした心持を見せて、くるりと向きを變へた。而して、すた／＼と家の方へ歩き出した。

三吉が、歸り着いたのはもう午近くであつた。

「おう／＼、御苦勞だつたな。さあ、もう何にも用は無え。さあ、それでもうゆつくりお祭りが出来るぞ。」と、おふくろさまは、土間に衝立つた三吉にやさしい微笑を投げかけたが、つゞいて、「あの手紙は届けて呉れたらうな？」と訊いた。その時、おふくろさまの眼が、玉の大きな眼鏡の中できらりと光つたやうに見えた。

「は、はい。」と三吉は、どきまぎする心押し隠して答へた。

「で、何にも返事は無かつたかい？」と、裏庭に面した縁端で、今夜檐に吊す提灯の用意をしてゐた若旦那が聲をかけた。

「へえ。」

「返事を呉れるやうにつて書いといたのにな。兵さんは居たかい？」

「兵さんは、居、居ませんでした。」と、三吉は眼をおどくとしながら低い聲で答へた。

「居なかつたのかい？」

「へえ。」

その時、お玉が、裏庭から土間にはひつて来た。

「三ちゃん、お前手紙を忘れたんべ。」と、無難作に言ひながら、手の先に、その白い封筒をふり廻すやうにした。三吉は、すつかり狼狽して、鮎が空気を吸ふやうに、口をあぶあぶさせながら、哀願するやうな眼附を、お玉から若旦那へ、若旦那からおふくろさまへと移した。

「どれ、それをお見せ。」と、おふくろさまがお玉に言つた時は、もう若旦那の疳癩聲が、三吉の頭の上におつこちて来た。

「この嘘吐き！ 横着な奴つたら。さあ、もう一度行つて置いて来う！」

三吉は足下に眼を落して、石のやうに立ちすくんで了つた。つい忘れて了つたがひるから遊びに出た時、届けに行くつもりで居た——かう辯解したかつたのだが、刹那にむらくと湧き上つた反抗心が、三吉の心持をすつかり硬ばらせて了つた。

「どうしてお前はさう横着だらうな。」と、おふくろさまは老人らしい詠嘆的な調子で言つた。

「手紙といふものは大事なものだ。いけませんぞ。仕方がない。忘れたのは自業自得だ。もう一走り行つておいで。」

「さあ行つて来う、ふんとに此奴の横着つたら。」と、若旦那は立ちかゝつて来て怒鳴つた。而して三吉の頭を指の先でぐいと突いた。——三吉は、その手紙を受取つて、またすどくと力ない足どりで裏庭の方へ出て行つた。

三吉は納屋の廂の下に、衝ツ立つたまゝ、しばらくちつと考へ込むやうな風をしてゐた。そのうちんと固まつたやうな顔には、もう涙などは出てゐなかつた。彼は、やがて手にもつてゐた手紙をびり／＼と引裂いた。而して、それを足でふみにじつて納屋に入つて行つた。

すこししてから、納屋から出て来た三吉は、洗ひ曝しの白飛白の筒袖に着換へて、手には小さな風呂敷を抱へて居た。彼は左右を覗ひ乍ら、小犬のやうな敏捷さでこつそりと裏の木戸口を出ると、

草履の音を高く立て、かけ出した。

菜畑の畦を越えて、坂をのぼつて、堤下の道に出た時、三吉は歩みを緩めて一寸振返つて見た。その眼は、猪首をふりたて、追蒐けて来る下女のお玉の、怖ろしく見据ゑた眼とびたりと會つた。

「三ちゃん！ 何處へ行くの？」と、お玉は喘ぎ乍ら叫んだ。三吉は一生懸命に駈け出した。

「おふくろさまが、話があるつて、だから、ちよいと戻つて來なつてば！」

おふくろさまといふ言葉が、妙な壓力で、その刹那、彼の足をおしすくめた様な氣がした。その間に、お玉はもうすぐ眼の前まで追ひ迫つて來た。

「何だい！ あんな糞婆あ！」投げ捨てるやうに叫びながら、又、一散に駈け出したが、その時お玉の手が、肩のところを引摺んだ。それを振りもぎると、今度は風呂敷に手がかゝつた。とう／＼風呂敷包はお玉に奪はれて了つた。三吉は傍の如に逃げ込んで、茶の木株を盾にとつて土を掘んで投げつけた。罵り乍ら叫び乍らの小さな格闘の後、お玉の逞しい腕は、とう／＼三吉の襟首を引摺んで了つた。

「あんちふ、強情な子だんべえ、まあ！」

小さな捕虜はぎら／＼と輝く眼から、大粒の涙を振りこぼしながら、ぐい／＼と、引摺りもどされた。

「ほんたうに呆れちまふ！ (お祭りだのに朝からこき使ふ！ こんなうちに何人が居るもんか) だの、(おふくろさまも糞もあるもんか！) だのつて、そりやあ、言ひ度い放題の悪態を吐いて——」
お玉は、ぜい／＼と息を切らし乍ら、大きな聲で言つた。三吉は、上框の傍に突立つて頭を垂れてゐた。若旦那はもう家には居なかつたが、若内儀様や、隣村からとまりに來た親類のおかみさんや、もう一人の下女のお霜や、家中のものが皆出て來て、呆れたやうな、さげすむやうな、冷たい視線を、一齊に三吉に集めてゐた。

「(おふくろさまも糞もあるもんか、あんな糞婆あ！) なんて。而して私に石をぶつ／＼けたりして——」と、お玉は多少得意さうな氣持を交へて、大袈裟な調子で一人でしゃべり立てたが、おふくろさまは、何とも言はなかつた。圍爐裏の横座にきちんと坐つて、ゆつくりと煙草を吸ひ乍ら、じろり／＼と眼を光らせてゐるおふくろさまの異様におしだまつた様子が、此の場の光景をもの／＼しくした。はじめは、反抗的に小さな肩を突つばらせてゐた三吉も、妙に悲しくなつて來て、とうとう、うしく／＼と泣き出して了つた。

「三吉！」と、おふくろさまは、やがて呼びかけた。「まあ、こゝへ來な。——こゝに着物と小遣とがある。けふはお祭りだ、まあ、兎に角、此の着物を着換へるのだ。」

おふくろさまの調子は案外優しくかつた。顔を仰へた腕の下から、おふくろさまの膝の前の、眞四角に疊まれた仕立下しの揃ひの浴衣、その上に載せられた新しい足袋、下駄、帯、手拭など、前から自分の爲めに用意されてあつたらしいのにちらと眼をとめると、三吉の心には自分のした事を悔いるやうな念が動かずには居られなかつた。

「さあ、着換へな。もう使ひなんかに行かなくてもいい。成程、祭りだといふのに、使に出したのはおれが悪かつた。」

三吉は、しやくりあげながら、もちくとしてゐた。

「これを、三に着せてやりな——おふくろさまは、お玉の方に顔をしやくつた。

「見ろ、こんないゝ着物を貰つて——、あんな悪態をついて、本當に勿體無えぞ。さあ、着なよ。着換へなつてば——」とお玉は、少し争ふやうにする三吉の腕や肩をこづき廻し乍ら、新しい着物に着せ換へてやつた。「さあ、足袋は自分で穿きな。見ろまあ、何も彼も新しくなつて——。ほんとにこんな着物なんぞ着せてやるのは勿體無え。」

「本當だ。三らがあ、家に居たんぢや、逆もこないゝ支度はして貰へるもんぢや無い、御主人様あ有難えだあ。」と、とまりに來てゐたおかみさんが言つた。

三吉は、まだしやくり上げてゐた。しかし仕立下しの揃ひの浴衣の爽かな感覚が、そのすゝり泣の下から、祭りの日の活々した楽しさを幽かに蘇らせるやうに思はれた。而して、これで勘辨して此儘祭りにやつて呉れるのか知ら？と思ふと、三吉の心はわけもなく躍り出さうとした。——が、その時、おふくろさまの眼が、又、じろりと光つた。

「支度が出來たら、此處へ來う、少し言ふ事がある。」おふくろさまはきつぱりと言つた。而して、物々しい調子で初めた。

「お前の父様も、それかれ父様の父様も、皆、うちのかまどで育つたが、皆、お前のやうぢや無かつた。あの律義者の子に、どうしてお前のやうな奴が出來たかと、俺あふんとに呆れてゐる。こんなうちに居るもんかと悪態をついたさうだが、こつちでも頼まれゝばこそ置いてやつてるんだぞい、此の前もお前が逃げて歸つた時、お前の父様は何といつた？ どうぞ今度だけは御了簡なすつて、置いてやつて下せえ、此奴がひとになるのもなれねえのも、皆、おふくろさまのお仕込一つだつて——さう言つて、お前の父様は涙を流して頼んだぢや無えか。もう、お前も十三だ、些たあ物の道

理もわかる年だ。」おふくろさまは、ぼんと煙管をはいた。而して、一層改まつた調子になって、「何もな、可厭だと言ふものを、無理に置かうたあ言はねえ。今日限り、ひまをやるから、さつさと歸るがよい。」

三吉は、思はず、おふくろさまの顔を見上げた。おふくろさまの可怕的眼は、眞直にこちらを見据ゑてゐた。三吉は肩をすぼめて首を垂れた。今、穿いた新しい足袋と下駄が、そのぼつと曇つた眼の下でちら／＼とした。

「さあ、一刻も居る事は無え。さつさと歸るがよい——今日が日、暇をやるんだつて、見ろ、仕度はその通り立派にしてやるんだ。それ此の手拭もお前がのだあ。小遣もちやんとある。これを持つて、さつさと歸りな、うち歸つて見る、お主が父様あ何といふか。」おふくろさまは、かういつて横の方を向いて、煙草の煙を吐いた。

歸れ、と言はれると、自分でも思ひ掛けなかつた心細さ、悲しさに、三吉はその心を捕へられた。それと共に、今着せられたその着物が、帯が、足袋が、下駄が、一種變て、こな、いかにも工合の悪い、而して、辛い、苦しい立場に自分を見出させた。大へんに濟まない、悪い事をしてつたやうにも思はれば、ひどく自分を傷つけられたやうにも思はれる。あやまり度いやうな、同時に、無

闇に腹の立つやうな——妙に矛盾したこんがらかつた感情が、意地悪く彼の小さい心を苦しめた。三吉はうか／＼とその不當な恩恵物を身に着けて了つた事を悔い乍ら、あとにも先きにも出られない、途方に暮れた、當惑した心持でもち／＼とそこに立つてゐた。その三吉の様子はたしかに、おふくろさまに或る満足と與へたらしかつた。

「何處だつてな、年季奉公の小僧に、帯まで揃へてやるうちは無えぞ。」おふくろさまは、その満足を一層強く味はうとするかのやうに、斯う力を入れてつけ足した。

「(お祭りが來たのに、未だ何もして呉れ無え。)なんて言つて——。」と、お玉は唇をつき反らして、嘲るやうに言つた。

「さあ、歸れ！」

おふくろ様に、重ねて怒鳴られたのを機會に、三吉は泣き／＼裏口の方へ出て行つた。

三吉は、納屋の横を廻つて、裏の木戸を出た。晝の日は輝かしく照つて、表通りの方からは、さざめき連れて行く人々の聲が高く響いて來た。近くの辻に引き出された屋臺かららしい笛太鼓の音が、浮き立つ様に賑かに聞えて來た。鎮守の森からは、太鼓の音と共に、海のやうなよめきが

明るい日の中を傳はつて来た。しかし三吉の心はすつかり萎けて、總てが皆白けきつたやうに思はれた。おん出てやると思つた先刻の心持には或る勇みがあつたが、實際、かうしておん出されて見ると、唯心細く、物かなしかつた。

三吉はしばらくの間、その櫓柱によりかゝつて、ちつと考へ込んでゐたが、總て涙の乾き切つたきらくと燃えるやうな眼をあげて、一寸あたりを見廻した。而して、帯を解いて、携りとするやうに着物を脱ぎ捨てると、風呂敷の中から先刻着てゐた古ぼけた單衣を出して着換へた。足袋も脱いだ。下駄も脱いで裸足になつた。それ等をひとまとめにして、

「こんな物うー」

かう、口に出して小さく叫びながら廂下に積まれた薪の上に、力一ぱいに抛りあげた。而して一散に木戸口から駈け出した。

今度は、誰も追ひ蒐けて来る者は無かつた。茶畑を抜けて、坂をのぼつて、堤下の道に出て、表通りの道へ出ようとするあたりまで来るとほつとした。それと同時に足が次第に重くなるのを感じた。

「歸つて見ろ！ 父様が何といふか。」とおふくろさまに言はれた言葉が、強くその胸に浮んだ。先

刻は、腹立ちまぎれに、全く前後の考へもなく逃げ出したのであるが、考へて見れば、かうして家に歸れば、どんなに父親に叱られるか判らなかつた。叱られる丈ならいゝが、屹度また、せんやうに連れ戻されて、わびを入れる事になる。それにきまつてゐる――。

うちには歸れない、戻る事も出来ぬ――三吉は、あとにも先にも行き場のない事を、全く進退の谷まつた事を感じた。而してその草堤によりかゝつて、しばらくちつと考へ沈んでゐた。

「小僧、どうしたい？ まつりに行かぬえのかい？ もうお神樂がはじまつてるぞ。」

誰かがかう聲をかけて、急ぎ足で通り過ぎた。三吉の心には、此時、あの満ちふくらんだやうな今朝の心持が、ちらと影をさした。この四五十日の間、あらゆる望みをかけて、待ちに待つた今日の祭りを、こんなにまでだいなしにされて了つた事を考へると――それどころか、今は、行き場も無いやうな自分である事を考へると、いふに言はれない情なさ^{なさ}が、彼の胸を一ぱいにした。彼はいつまでもさうして、そこによりかゝつてゐた。而して、おふくろさまでも、若旦那でも、お玉でも親父でも、それから自分一人だけを仲間はずれにして祭りに騒いでゐる村のすべての人々までが、皆して自分をめのかたきにしていぢめてゐるやうに思はれた。

――ふと、彼の心にある考へが浮いた。さうだ、五町の叔父さんところに行かう！ こんな貧乏村

にわたつてつまらない、百姓奉公などしたつてつまらない、俺がところへ来て町つ子になれ！ つか逢つた時にさういつてすゝめた叔父の顔が——つゞいて、一度行つて見た事のあるK町の、いつも祭りのやうな賑かな光景が、幻のやうに思ひ浮べられた。

さうだ、町へ行かう！ この突然の決心は、子供らしい單純さで彼を動かした。

三吉はふら／＼と立上つて歩き出した。——その足は一步一步と、勢づいて來た。

五分の後、三吉は、村を南へ通じる街道を、すた／＼と歩いてゐた。汗が額を流れて、埃がほつほつと身體を包んだ。向うから揃ひの着物を着た同じ年配の少年の一群が、何かわい／＼と叫びながらやつて來た。それは、晝飯を食べに歸つて、また神樂の方へ出直す仲間らしかつた。その顔は皆、晴れやかな喜びで輝いてゐた。

「三ちゃん、お前、どこへ行く？」と、中の一人が聞いた。

「K町へ行くんだ。」と三吉は、傲然とした調子で答へた。

「だつて今日はまつりぢや無えか。お前、まつりにやいかねえのか？」

「いかねえ。」と、三吉は怒つたやうに言つた。

「何しに行くの？ お前裸足ぢや無えか。」

「遊びに行くのかえ？」と他の一人がきいた。

「もう歸らねえんだ。」と三吉は言つた。

「歸らねえ？」

「うん、もう行つたきり歸らねえんだ！」と言ひすて、三吉は、呆れたやうな顔をして見送つて居る友達をあとに、大股に、すた／＼と歩いて行つた。

村境の丘を越えると、眼の前に廣い野が——新しい地平線がからりと開けた。その野の向にトタンの屋根を光らせてゐる小さな停車場から十五六哩のところには町があつた。

三吉は、そこまで來た時立ちどまつてほつと息を吐いた。而して、後の方をふりかへつて見た。

十三年間三吉を育てて呉れた産土の、鎮守の森からの囃子の音は、フアミリアルな、馴染深い調子で、招くやうに誘ふやうに、何處へも行くな、こゝへ來い！ と引きとめるやうに聞えて來た。村一ぱいに充ち溢れてゐる祭りの日のどよめきは、追ひすがるやうに波うちよせて來た。——三吉はふら／＼とその方に引きつけられようとする心を抑へるやうに、

「町へ行きや、始終、祭りのやうだあ」と叫んで、自分自身をもぎはなすやうに歩き出した。ふと、又、今朝までの、今日の祭りを待ちかまへてゐた心持が、遠い夜の夢でもあつたかのやうにその心に影をさした。何となく物悲しいへんな氣持がして、眼の底から涙がにじみ出して來た。

「町に行きや？」

もう一度かう繰返して、三吉はすたくとわき目もふらずに急ぎ出した。

土の匂ひ (八年七月作)

婆や——私は、子供が呼ぶのに倣つて、宅の老婢を斯う呼んで居る——は、此頃熱心に土いぢりを始めた。庭の隅々に、掌ほどの畝を起して、胡瓜、茄子、南瓜などの苗をすらりと植ゑ並べて、仕事の合間々々に、せつせと、水をやつたり蟲を捕つたりした。

或る夜、それはもう十時過ぎてからであつた。庭先で何かこそぐと音がするので、大か知らし

と思つて、雨戸をあけて見ると婆やである。湯に行つて居ると思つて居た婆やは、何時の間にか歸つて来て、又、土いぢりをやつて居るらしい。

「また、何か植ゑるのかい？」と、私が笑ひ乍らいふと、

「ええ。今日、おわいやさんに持つて来て貰ひました甘藷の苗で……。」と、婆やは返事も上の空で一心に、唐鍬の柄の折れたやつで土を起して居る。

「ほう、甘藷まで植ゑるのかい？」と云つて私は思はず苦笑した。そこは丁度、私が机を据ゑて居るところの、眞前に當つてゐる。鼻の先を甘藷畑なんぞにされてはやりきれないな、と思つたが、あれほど熱心にやつて居るのだから、それをとめるわけにも行かない。結局、私は苦笑するより外

は無かつた。私は苦笑しながら、六年前に、此の家に越して来た時、何よりも此の庭の廣いのが氣に入つて、ひとつ、此の庭一ぱいの立派な花壇をこしらへてやらうと計畫したことを思ひ出した。たしか、その計畫の爲めに、わざ／＼一冊の家庭園藝書といふやうな本を買つて見た筈である。夜店から古い唐鍬をも探して来た。しかし、その日のくらしの忙しさの爲めに、つい、種子蒔、植附の時機をとりはづしたりして、花壇の計畫はいつの間にか立消になり、縁日ものの一鉢二鉢の、ほんの申譯丈の貧しい色彩で、僅かに心を慰めるに過ぎ無かつた。黒い柔かな耕土で出来た此の庭には、いろ／＼の雑草がよく繁つた。その雑草のかけに身を忍ばして、輪の小さな矢車草や、色の褪せたゼラニウムが、みじめにいちけて咲いて居る——その淋しく荒れた庭の姿は、同時に、私自身の心のすがたでは無かつたらうか。あまりに早く来た家庭生活の幻滅とそれに伴ふ倦怠とが重く心におしかぶさつて、私は何をするのも懶かつた。私は、私の庭を唯茫々と草の繁るに任せてゐた。而して私の心をも。

が、やがてはじめての子が——洋一が生れた。而して、庭が廣いので、襦袢を干すのに都合のよいのが、妻の一つのよろこびとなつた。洋一が、やがてちよ／＼と歩き出すやうになつてからは、彼の遊び場として、庭の廣さがよろこばれる様になつた。私は、彼の手足を傷ける毒蟲などを除く

爲めに、今まで生えるまゝにまかせて置いた庭の雜草を退治した。而してまた彼の爲めに、すこしばかりの花を植えてやつた。赤い鼻緒の結ひつけ草履を穿いて、束帯ない歩みを運ぶそのかあゆい者の爲めに、私は再び庭に親みをもつやうになつた。子供の爲めにも、而して、自分の爲めにも——と、私は考へた。大に花を植ゑよう。これ丈の庭を有つてゐて、そのまゝ抛つておくのは全く勿體無い、大に花を植ゑて朝夕の豊富な色彩を享樂しよう。——かうして、此の庭を得た最初の、花壇の計畫は、再び私に蘇つたのである。だが、その計畫を實現するには、その時分の私はあまりに忙しくなつてゐた。時々、思ひ出したやうに、一株二株を植ゑて見ても、それなり、花が咲いたか、咲かないかすら、ろく／＼気が附かずにしまふことが多かつた。

ところが、今度のばあやが来てから、庭は初めて深切な主を得た。千葉の流山の在から来たばあやは、十分に、土を愛する心をもつて居た。「この庭と云つたら、まるで畑だ、草畑だ。」などと呟きながら、忙しい仕事の間を見ては草取りをした。而して、お隣の眞似をして、垣根に添うた側に、莢豌豆を蒔いた。黒い土の中の、ありあまるほどの養分を吸つて、豌豆はすばらしい勢で伸び育つた。そのわりには、實はつかかなかつたが、婆やはそれを朝の味噌汁に入れて、自慢さうに私達にすすめた。

婆やの土いちりは、しかし、去年はまだそれほど熱心なものでは無かつたのだが、今年は、妻が「婆や此頃夢中になつてゐる」といふ、その夢中といふ形容もそれほど誇張ではなかつた。どこからとも無く、いろ／＼のものゝ種子や苗を見付けて来て、蒔いたり植ゑたりした。少し耳が遠いのだが、横町の角を通る苗賣の聲などは、不思議によく聞きつけて、慌てゝ飛び出して呼びとめた。而して、毛糸の中着からいくつかの銅貨や白銅を出して、それを買つた。そのお錢は此方から、と云つて妻が出してやると、もぢ／＼してなかく／＼とらなかつたが、それをとると、またそれで別の苗を買ひ込むのであつた。

「まあ、そんなに買つて、どうするの？」と妻が笑ひ乍ら云ふと、

「えゝ。お庭が廣ございますから——。」と云ふのだが、廣いと云つても二三十坪に過ぎない庭は、今では、茄子、胡瓜、莢豌豆、西瓜、南瓜などの畑(？)で、すつかりその周囲をとりかこまれ、真中の空地は次第に狭められて、干し物竿をもちあつかひ兼ねるほどになつてゐた。

「まあ、夜まであんな事をして。おかしな婆やね。をいもを植ゑるんですつて？」と、傍で、縫物をしてゐた妻は、笑ひながら私に云つた。

「婆やの丹精で、いまに八百屋の御厄介にならないで済むやうになるかも知れないぜ。」と、私も笑ひ乍ら云つた。

「干し物の時に一番困るのよ。——一寸足を踏み入れても、『そこには西瓜が蒔いてあります！』なんて——。婆やはそりやおこるのよ。私、毎日いく度婆やに叱られるか知れやしないわ。」と、妻は一寸苦笑したが、今度は眞顔になつて、

「それに畑の事ぢや毎日洋ぢやんとも喧嘩ばかりしてゐるんですよ。あれが一番困るわ。」

「あれは困るね。」と、私も眞面目に考へながら云つた。此年五つの悪戯盛りの子供に、その悪戯を恣にさせるところは、この庭より外には無かつた。この二三十坪だけが、我が小さき暴君の支配に任せられた領分であつた。この領分は、併し、今では婆やの爲めに殆んど全く占領されてしまつた。

「坊ぢやん、いけません、そんな事しては。豌豆の蔓がきれてしまひます！」

「まあ、坊ぢやんは、また蠶豆の芽を抜いてしまつた！」

こんな風にして、洋一はよく婆やに叱られた。洋一もなか／＼云ふ事をきかない。小さな葛藤が、毎日のやうに繰返される。

婆やの野菜作りもいゝが、あれは困るな——と、私はいつも思ふ事を其時も思つた。

「でも、あんなに熱心なんだから、叱るわけにも行かないし——。あんなに蒔いたり植ゑたりしても、どうせうまく行きやしないんですから、その手間で、花でも作つて呉れるといゝんだけれど。」

「さうだね。」

「私、花なら好きよ。あなた、一時、花を作る計畫をお立てになつたのぢやないの？」

「うん。」

赤、黄、紫、白の様々の花が露を含んで、眼もあやな色彩を一面に揺り動かしてゐる花壇を思ひ描いた私は、それと、今そこに出来てゐる野菜畑とを對照して、そこから来る皮肉な感じに、再び苦笑させられた。何一つ、自分の計畫を實現する事の出来ない自分の意志の弱さや境遇の不自由さを思ふと、一寸かなしいやうな氣もすれば、腑甲斐無さの嘆かるゝやうな心持もした。あの婆さんは、兎に角思ひ通りにやつて行く、あの婆さんの方がおれより餘程えらいなどと思つて見た。

しかし、本當に敬虔な、土に仕へる精神からすれば、花など作るのは勿體ない事だ——。私は自分の花壇の計畫のものにならずにしまつたのを、自分自身に云ひわけするやうな心持で、かう心に思つた。花をつくるなんて贅澤なことだ——。

するうちに、私の心には私の故郷の、十年前までは私自身もそれに親んで居たところの、農民の

生活が思ひ描かれはじめた——ふと、今はもうとりはらはれてしまつた故郷の家の、庭先の穀庫の戸に、一尺四方位の大きな字で祖父が書きつけておいた詩の句が、記憶の表に浮いた。「鋤禾日當午、汗滴禾下土……。」といふ句が——。

「手が荒れるから、大がいにした方がいゝと云ふんですがね。」と、妻は、しばらくしてからちよきちよきと鉄を鳴らしながら斯う云つた。

「しかしね、お前なんか、都會に生れた人間だから、よくわかるまいが、田舎育ちのものは矢張土が必要なんだよ。丁度、魚に水が必要なやうにね。土いちりの樂みはお前なんかにはわからないさ。

——おれには、よくわかるがね。」

「さういふものですか知ら？」と妻は云つたが、圓くみひらいた、いたづらさうな眼で、一寸私の方を見て、「でも、あなたは田舎育ちでも、些^{ちよ}とも土いちりなぞなさらないわね。草取り一つなさらなかつたぢや無いの？」

「忙しいからさ。」と私は云つたが、あとから慌てゝつけ足した。「それに、おれは無精だから——。」
「無精も無精だけど、矢張おきらひなんだわ。だから、つまり、東京へなんか出ていらつしやつたのぢや無いの。」

「いや、さうぢや無い。」と私は眞面目になつて、強く打消した。「百姓がしてゐられるもんなら、おれは百姓になつてゐたんだ。こんなところへ来て、こんなくだらない事をして、醒^さ醒^さしてゐるよりや、百姓をしてゐる方がどんなに呑氣でどんなに仕合せだか——。」

「屹度、いゝお百姓さんが出来てよ。」と、妻は小さい聲をたてゝ笑つた。——私は一寸不機嫌な氣持になつて考へ込みながら、机の上の原稿紙にらく書をした。鋤禾日當午、汗滴禾下土——その次の句の、初めの二字が何であつたか、はつきりと思ひ出せない。誰知——だつたか知ら？ 誰知盤中糝、粒々皆辛苦——、米庵の孫弟子位になる、かなり上手な書家であつた祖父の、あの、大きな鉄を揮つた大きな手で書いたであらう雄健な書體を思ひ浮べながら、私は幾度も幾度も、その詩の句を書いて見た。

やがてペンを抛り出した私は、掌を机につけて兩方の指をのばして見た。それは、代々^{だいでい}の前から傳へられた、節の高い、先の丸い、太い指である。ペンを執る指では無い。鋤を握る可き指である。私は、その無恰好な指を、開いたり反らしたりして、つくぐと眺めてゐた。

「何を考へ込んでいらつしやるのよ？」
「うむ。」

私は、今度は両手の指を組み合せるやうにして、矢張考へ込んでゐた。戸の外で、婆やが水をやるらしいばしやくといふ音を聞きながら――

而して、ちつと、障子の棧のところを見つめた私のうつろな眼の前には、故郷の野の光景があつた。香ばしい匂ひを放ちながら日の光にさら／＼と揺れる黄熟した麥の穂波――しつとりとこめた朝霧のなかで爽かに鳴つてゐる緑の桑畑――家々の庭からきこえて来る穂打の唄――雀色の夕暮を影のやうに動いて行く野歸りの人々――。かすれた活動寫眞のやうに、これ等の光景が、雜然と、私の眼の前を通り過ぎた。而して、あの濕つぽい、すが／＼しい、何とも云へずなつかしい土壤の匂ひ――それは、あの小さな停車場のプラットフォームから一あし踏み出すと、すぐに私の全身にファミリアルな、柔かな、夢見るやうな官能を眼ざめさせるところのものである――が、はつきりと私の感覚に感じられるやうな気がした。あゝ故郷の野の匂ひ――それはかうして思ひ出したばかりでも、私の胸の血を躍らせずには居ない。私は今、忙しい都會の生活に苦められて、終日土を踏まないやうな日を續けて居る。しかし、此の太い無格好な指と一緒に、遠い祖先から傳へられた野の人の精神は未だ私の心の中にかすかに息づいてゐると見える――。私はそこで、時ならない郷愁に捕はれて了つた。而して、婆やがあゝやつて、夜になつてまでも土いちりする氣持が、強く私の胸

に受け入れられた。それにあれば、さびしい老人なのだ。少し低能で、敬語の自他の使ひ分けなどもよくわからない位で、時々、ふと思ひ出して話をしかける事があつても、話の筋道や順序がよくつかない上に、妙に舌もつれのする早口なので、聞く方でも薩張わからないことが多かつた。で、一生何人からも相手にされずに、ぶつ／＼と獨り言をいふより外無いやうな淋しい婆さんなのだ。だから、餘計に、故郷が、土が戀ひしいのであらう。――さう云へば、おれの性格にも亦、あの婆さんのやうな愚かしい而してさびしいところがあるのだ。だから、東京へ来て十年にもなるが、どうもうまく、此の都會生活に調和することが出来ないのだ――。しまひには、こんな事まで考へて来た私は、

「さうだよ。おれだつて、矢張田舎でくらす人間なのだ。」と口に出して云つた。それがあまりだしぬけだつたので、妻は一寸驚いたやうに私の方を見て、

「まあ、何をいつていらつしやるの。――私、田舎はいやだわ。」と云つた。少なくとも此の瞬間、私と妻とは互に全く異邦人であつた――。

梅雨があがると、日の光がまばゆさを加へて、盛な大地の息吹は、婆やの野菜畑にも著しい生氣を與へた。婆やは、ひまさへあれば庭に出て、金色の日を吸うた胡瓜の花や、つや／＼と青きつた南瓜の葉を飽かず見まもつた。一寸首をかしげて、それ等の一々を玩味するやうにしみ／＼と見入つて居る、いかにも満ち足りた恍惚としたその様子には、土に仕へるもののみがよく知つてゐる筈の、深い喜びが見られた。

「ねえ、坊ちゃん！ 花を摘まないで下さいませよ。もうすこしすると、こんな大きな胡瓜がなりますからね。」

こんな事を洋一に云ひきかせて、

「それから、おいもも出来ます。こんなに大きな——。」と、手で大きさを描きながら、はずんだ調子で自慢さうに云ふ。

「何だい？ おいもなんぞ、八百屋へ行きやいくらもあらいい！」

洋一は不平でたまらないといふ様子で、投げつけるやうに云ふ。

で、婆やは、縁側のところで張物をしてゐる妻に話しかける。妻は、些とも興味をもつては呉れない。今度は、私をつらまへて、

「旦那様、御覽なして下さい。あんなにおいもの蔓が——。」

「お／＼、すばらしくよく伸びてゐるな。」と、私はさすがに微笑みながら御愛想を云ふ。すると婆やは得意になつて、何か、甘薯の作り方、西瓜の肥料のやり方といふやうな事をしきりに話し出すのだけれど、例の言葉が不明瞭な上に早口なのでよくわからない。私は、唯、おそろしくはしやいだ、昂奮した、婆やの小さな顔を見ながら、

「うん／＼。」とい／＼かげんに返事をするより外は無かつた。しかし、

「こんな大きな筈に一ぱい——。」と、婆やが両手を前に出して叫ぶやうに云つた時、それが、彼女の郷里での田園生活について語つてゐるのであることを知つた私の心には、今、彼女の目の前に展べられてゐるらしい、利根川べりの平野のひろ／＼としたさまが想像された。——

七月の初めに婆やは身體をそこねた。去年もその頃に五六日寝たが、身體の癖になつてゐる時候あたりであらう。平常大へん丈夫で、氣の毒なくらゐよく働いて呉れるのであるが、すこし身體が悪いとひどく減入つて了ふのであつた。今度は殊に力無い様子で、薄暗い四疊に仔犬のやうに小さく寝てゐた。今年の春、たつた一人の姉が亡くなつたといふので、大へん力を落して、その當座、

餘計耳が遠くなつたり、忘れつぽくなつたりしたが、今度の病氣にはその力落しも手傳つてゐるやうに見えた。さういへば、彼等が、こんなに熱心に野菜作りをはじめたのも、その悲しさ淋しさをまぎらす爲めであつたかも知れない。

「ばあや。何でも無いんだからね。たゞ、ほんの時候當りだけなんだから——。すぐよくなるからね。しつかりして、喰べ度いものがあつたら何か喰べて御覽。」身體よりも心の方がまづ弱つてゐるやうに、だまりこくつて悄れかへつて、殆ど飲まず食はずで寝てゐる婆やの枕許へ行つて、妻がこんな事をいふと、婆やは涙ぐんだりなどした。彼女は若い時に一度かたづいたのださうだが、すぐ離縁になつて、それからすつと一人であつたので、子といふ者もなかつた。たつた一人、頼つたり頼られたりした姉に死別してから、今、肉親といつては甥が一人ある丈であるといふ。その頼り無い身で、かうして、他人の家で病んで居る——その心細さを思ひ遣ると、本當にいぢらしくかあいさうでたまらない氣が私はした。だが、彼女に寢込まれてしまつたので、私までが子供を抱かせられたりなどして落着いて仕事が出来無い、丁度其時忙しい仕事があつたので、私はともすれば心が苛立つた。而して五日も六日もはかばかしくよくならない婆やの病氣が、すこし癪にさはつて來た。——すぐにそのあとから、あまりに我儘な、愛の足りない自分の感情に、われとわが眉を擧めなが

らも——。

丁度七日目位の朝、婆やは漸く起き出した。

起き出したばあやは、先づ第一に庭へ出て見たやうであつた。

「まあ、坊ちゃん——。」といふ力無い叫びが、茶の間の方にゐた私達に聞えた。

私は縁の方へ出て見た。するとどうだらう？ 喪心したやうに立つてゐる婆やの前に、いつの間にか踏み荒らされた無様な野菜畑があつた。胡瓜の花も南瓜の花もすつかり撈りとられ、豌豆の蔓はひきちぎられ、甘蔗の畑にも幾つもの小さな足あとがついて、ぶりきの籬だの、棒切れだのが落ち散つてゐた。

「まあ、すつかり駄目になさいました。坊ちゃんは、まあ——。」婆やは、泣き出しさうな顔をして、訴へるやうに私を見た。

「まあ、いつこんなにしたんだらう。私、毎日やかましく叱つただけけれど。今朝よ、屹度今朝になつてからしたんだわ。昨夕まではちゃんとしてたんだのに——。」と、驚いて出て來た妻は、流石に濟まなさうに云つた。つづいてひとりごとのやうに呟いた。「前の通りで自動車に轢かれた子があつたりするもんだから氣味が悪くて、なる可くうちで遊んでおいでといつてるもんだから——。」

すばしいたづら者！ 私は丁度その時、朝の一あそびを了へて、木戸からはひつて来た洋一を認めると、

「洋一、お前は馬鹿だな。婆やの畑をこんなにしてしまつて。」と叱りつけた。洋一は、私の激しい調子で、すつかりおどくとして了つたが、哀願するやうな眼つきを私の方へ向けて、

「だつて——おとなりの亮ちやんだの、お向うの榮ちやんだのがお呉れつていふから——。」と云ひさして涙ぐんでしまつた。その胸のところには、萎れかけた胡瓜の花が勳章のやうに飾りつけられ肩には豌豆の蔓や甘藷の蔓が綬のやうにかけられてゐた。私はその無邪気な様子を見ると、一寸噴き出したいやうな氣もして、もう此の上叱れなくなつてしまつた。さうだ、婆やもかあいさうだけれど、さうかと云つて、その爲に洋一を叱るのもかあいさうだ。それはたしかに無理な事だ——。さう考へながら、私は、又、故郷の野を想ひ描いた。而して廣い野から野へと、土まみれになつて、穂のやうにころがつてくらしした、自由な快活な少年期の生活を回想した。而して、この小さな庭さへ自由にならない子供の生活をみじめなものに思つた。私の心は次第に憂鬱になつて行つた。

手

(八年一月作)

それは二月になつて始めての火曜日でした。昨夜からの雪は、ちらくちらくと、繁くもならずあらくもならず、おなじ調子で、根氣よく降り續けてゐました。代用教員のTは、受持の尋常五年に、第三時間目の地理を教へて居りましたが、小使の爺さんが、廊下の窓から無遠慮に首を突込んで、

「T先生！」

と、間の抜けた聲で呼びかけながら、一通の手紙——小型な、桃色の封筒の——をさし出しました。

Tは、慌て、教壇を駆け降り、ひつたくるやうにしてそれを受取りました。而して、その封筒の上書に、落ちつかない視線を滑らせながら、「とうく来たな。」と思ひました。古ぼけた詰襟の羅紗服で包まれた、腺病質らしい狭い胸の中では、激しく動悸が打ちはじめ、手紙を持つた指先まで慄へが傳はりました。彼は、すぐに、そのふるふる指先を「蕾」と書いた封じ目に當てましたが、思ひ返して、其の儘ポケットの中に押し込んで了ひました。而して、ぐつと下腹部に力を入れて、二三度、激しく首を左右に振りました。

Tが宿直室の暗いランプの下で、N子に返事を書いたのは、前週の土曜日の夜でした。その日、彼がN子から受取つた手紙は、この二三年來の彼と彼女との關係の、愈々最後の段落に達したことを、婉曲に、しかし決定的に傳へて來たもので、最近、彼女に起つたといふ幸福な嫁入話よめいりわたりが、動かし難い結論でもあるかのやうに云ひ添へてさへありました。その手紙を読み了つた時、彼は先づ苦笑しました。何故ならば、彼ももういゝかげん、彼女に飽きて來たところですから。……晩おそかれ早かれ、どうせ斯うなる筈だつたのだ、あんな女に、いつ迄かゝり合つて居られるものか、丁度いいのだ、これで世話は無——彼は苦笑と共に、斯う呟いたのでした。だが、手紙を眼の前にひろげて、何がなしにぼんやりしてゐるうちに、次第に、その苦笑の中から笑ひの分子が消えて、苦みくるみの方ばかりが、滓すじのやうに心に残されて行きました。何故ならば、どうせ斯うなるものとはいへ、女から先に、それをきり出されたといふ事が少なからず彼の誇りを傷けましたから。……「何卒、私は既にあなたに用なきものと御見捨て下され度く」など、いかにもおれが、おればかりが、未練で苦しむかのやうに書いてゐるが、一體、何方どこから先に求めて來た戀だといふんだ？ 見捨てるも見捨てないも此方の勝手だ！ 生意氣な——やがて腹立たしくなつて來た心の中で、彼はかう

叫びました。ところが、そのうちに、その腹立に、一種の深い悲みが交りこんで来て、激しい痛みをもつた感情が、彼の心の中に醸されはじめました。唯一人の戀人、とにかくそれは戀人です、それをなくして了つたあとの自分といふものを考へると、餘りに淋しく、餘りにみじめでした。……晩かれ早かれ、斯ういふ事になるには決まつて居る、だが、少し早過ぎる。親友のHとは離れて了ふし、上京の望みも叶ひさうもなし、今は、おれの一番淋しい、一番心の暗い時なのだ。色の褪めた戀には違ひ無い、いゝかげん倦きてゐる女には違ひ無い、しかしそれでも、今のおれにとつてはこれが唯一つの慰藉なぐさなのでは無いか。それが今急に、ふいとなくなつて了ふとすると、——あゝ、そのあのおれは、餘りに淋しいみじめなものになる——。とう／＼彼は、その手紙の前で、大きな溜息を一つついて了ひました。で、斯う心が弱くなつて来ると、それにつけ込んで、彼女と相知つた抑々からの事が、妙にロマンチックな色合を帯びて浮び上つて来る、彼女のいゝところばかりが思ひ出されて来る。而して、根強い愛執の情を縁づけて、涙ぐましいやうな心持が、胸一ぱいにひろがつて来るのでした。

Tがさうして手紙と睨めつくらをして、考へ込んで居ると、庭先の砂利をがら／＼と鳴らして、同僚のSがやつて来ました。

「すてきに寒いな。火も熾さかさないで、何をぼんやりしてゐるんだい？」

Sは、例の軽快な調子で、こんな事を言ひながら、袂からウイスキーの小びんを出しました。

「こんな晩にや酒でも飲まなけりや。」と、Sがいふと、

「さうだ。こんな晩にや。」と、Tも合槌を打つて、二人で、その強い酒を少しづつ嘗めました。而して、未だ、びんの三分の一を空虚にしたばかりなのに、二人とももうかなり酔つて了ひました。いろいろの話の末が、矢張戀といふ事に落ちて行きました。そこで、Tは、それとない調子で、若し相手の女が自分に背を見せかけた時には、どういふ態度をとるのがいゝか、といふ問題にまで話を導いて行きました。

「さうだな。」戀といふ事にかけては、Tなどよりもずつと経験家と自信してゐる上に、それが、Tが今實際にぶつつかつてゐる問題だといふ事などは、夢にも知らないSは、勿體振つた様子をして言ひました。「そりや、無論いさぎよく思ひ切るんさ、而して、さつさと引きあげるんさ、戦争と同じ事で、戀でもこの退口のきぐちが大切だよ。相手に少しでもそんな様子が見えたら、先を越して此方から先に引上げるんだね。此の退口を下手にやると、散々に兵を損ふ。そこでぐづつくと、實際、餘計なしなくてもいゝ苦みをしなければならぬものだよ。何でもいさぎよくきり上げて、さつさと引き

あげるんだ。——引きあげ方さへうまくやれば、負けた戀でも勝ちになる。——もし、それが出来なきや、飽迄も追撃するんだな。短兵急におつかけるんだな。深く思ひ切るのも勇氣だが、思ひ切らずに飽迄もおつかけて行く——これも慥かに一つの勇氣だ。」

「思ひ切るか、追つかけるか——」Tは、かう呟いて、一寸考へ込みました。

「さうだ、思ひ切るか、追つかけるか——。中途半端の未練といふやつが一番いけない。男の戀に未練といふ奴は一番禁物だ。——尤も、女の戀には、未練が生命だがね。女のくせに未練のない奴は、本當に戀の出来るやつぢやない。」

「思ひ切るか、追つかけるか——」と、Tはもう一度繰返しました。

「でなきや、未練で女々しく苦むか。この三つの外は無いだ。」

「矢張、いさぎよく思ひ切るのが一番男らしさうだな。」

「さうだ。——追つかけるのもいゝが、女なんて、元來、それほどの價値のあるもんぢや無いからな。」と、Sは妙に悟り済ましたやうな口吻で云つたが、「思ひ切るんだね。何か、かう、ぐいと胸を抉るやうな、一生、忘れられないやうなセリフを一つ残してね。而してさつぱりと別れて了ふんだ。」と、益々得意さうになつて、その辯極めて月並な結論を下しました。

「さうだね。」

Tは、又、一寸沈吟しました。それを見ると、Sは、始めて何かに氣がついたやうに、

「で、何かい？ 何か君自身にそんな事があるとでもいふのかい？」

「いや、——馬鹿な！ そんな事無い。」と、Tは、赤い顔をして、どぎまぎしながら打消しました。

Sはやがて、呑み残りのウイスキーのびんを袂にぶらつかせ乍ら、がらくと砂利を鳴らして歸つて行きました。

Tは、燃える頭を窓から突き出して、寒い風に吹かせ乍ら、また、「思ひ切るか、追鬼けるか——」を繰返しました。黝いほど蒼い、磨ぎ澄ました鋼鐵盤のやうな夜天には、小さい月が冴えかへつて居りました。月の光は、中空にうなりを立て、渡り行く風に吹き碎かれながら、運動場の面に落ちて居りました。白曝れた運動場には、櫻の梢が影を寫して、そのくつきりと描かれた細かな網目がざわ／＼と鳴る音と共に、わな／＼き揺れて居りました。

彼は、不意に、窓から外に飛び降りました。而して、その水銀の滴のやうな光に全身を濡らしながら、涯も無く遠い大空を、大空の彼方の月を眺めました。月を眺めながら、暫く運動場を徘徊し

てゐるうちに、一種の感激が彼の胸に來ました。彼は自分に向つて叫びました。「さうだ。男らしく思ひ切らう！ いさぎよく。」

彼は、部屋に歸つて、その「男らしい」手紙を書く爲めに筆を執りました。今の彼女は兎も角も、今までの彼女は、まめやかな、心の優しい戀人であつたには違ひ無い。自分の若い日の淋しさを慰めて呉れた彼女の愛に對しては、純粹な感謝を保つ可きである——。書いてゐるうちに、こんな事が考へられて來ました。彼の心持は、勝敗とか、退口の手際とかといふやうな、そんな打算や技巧から離れて、案外、嚴肅な沈痛なものとなつて來ました。そして、その別れを叙する言葉は、寧ろ悲壯とも云ひ度いやうな調子を帯びて來ました。「左様なら。あなたの此後の生活に光榮多からんとを。」といふやうな文句で結んで、封筒へ宛名を書いて、それを机の上に投げ出して、上目つかひに窓の上部のところを見上げた時、彼は、實際一寸悲劇の主人公じみた心持をすら感じました。

しばらくの間、彼は、妙に沮喪した心持でその机の上の手紙を眺めて居りました。「S——N子」長い間、自分の心臓に刻みつけられてゐた此の名も、もう今日限り、全く自分とは何の關りもないものとなつてしまふのだ。「B——市A——區S——町L——番地」何十回何百回となく書き馴れて、一字一字に一定の筆癖さへ出來てしまつたこれ等の文字も、もう永久に書く事は無くなるであらう。

さう思ふと、彼の心は、またわけもなく悲しく心細くなつて來ました。

彼の眼の前には、N子の圓い大きな眼や、始終明るい微笑を漂はした無邪氣な口元や、メロディアスな甘えるやうな言葉が、挑みかゝるやうな姿態を以て浮び上つて來ました。又しても、いろいろの過去の記憶が、未來派の繪のやうに、ごちゃ／＼と心の壁に描き出されました。彼は、冷い壁の上に仰向けに寝て、ぎら／＼と光る眼で天井を見つめながら、深い溜息をしました。——氣がついて見ると、その心の中には、いつの間にか、嫉みに裏附けられた強い執着が、しつかりとその位置を占めて居ました。これで別れて了ふ、それツきりになつて了ふ、何處かの男に渡してしまふ——それは、しかし、堪へられない事だ！

二三分すると、彼はいきなりはね起きました。而して机に向つて巻紙をひろげました。どうしても、もう一度引き戻さなければならぬ——彼は、筆の軸を噛み乍ら、うめくやうに斯うつぶやいて、しばらく巻紙の上に瞳を凝らして居ましたが、やがて、書き初めました。心臓を引きちぎつて打附けるやうな心持で、思切つて亂暴な文字で書きはじめました。變心——無節操——斷じて許せぬ——お前の自由は僕の手にある——。書いて行くうちに、自然と、暴い激しい調子になつて、その加速度的な興奮が、遂に抑へる事の出來ないものとなつて來ました。一氣に書いて行つて、最後

に、もしお前が不貞な裏切者となるならば、俺は悪魔となつて呪つてやる——と書いた時は、さすがに、少し誇張に過ぎるな、と気がつきましたが、兎に角、これでもう一度彼女を引戻す事が出来る、といふ自信と、それに伴ふ或る満足とを以て、彼は筆を措きました。かうしてもう一度引きもどす、其の上で此方から立派に捨て、やるんだ。その封じた手紙をちつと見つめて唇を噛みながら彼は、自分自身に念を押すやうに、かうつぶやきました。

彼の前には、二通の手紙が置かれました。彼は、交る／＼それを打ち成り乍ら、また二三分間、ちつと考へ込みました。

だが——と、彼は思ひました。だが、これは慥かに卑怯な事だ。男らしくない事だ。逃げようとする女を追蒐けるなんて、餘りに女々しい、恥づべき振舞だ！ 而してまた残酷な事でもある。——この寧ろ脅迫状とも云ひ度いやうな、呪ひに充ちた手紙を手にした時の、彼女の當惑した顔附も眼に浮んで來ました。あれは、多少横着ではあらうが、極めて無邪氣な女なのだ。而して、少なくとも嘗ては自分に誠實な愛を捧げてゐたのだ。それをこんな風にしていぢめつけるなんて、何といふ淺ましいこの心だらう？ いけない！——彼は、立上つて、室の中を大跨に歩き廻りました。あの、一寸前の、男らしい覺悟を呼び返す爲めに、窓に倚つて、風のうなりにふるへてゐるやうな

大空を、その奥に冴えかへつて、ぐる／＼と旋回してゐるやうな月を、もう一度打ち眺めても見ました。

彼は、後で書いた手紙をとりあげて、決然として、それを裂き捨てようと思ひました。が、一方の心が、それを支へました。「だが——」彼は呻くやうに呟き乍ら、また立ち上りました。

かうして彼は何度も立つたりすわつたりしました。而して二通の手紙を交る／＼取りあげて見ました。而して、その何方をも思ひ切つて破り棄てる事の出來ない心持に、全く平均に二通の手紙の間に保たれてゐる心持に思ひ悩みました。實際、そのとつおいつの間に、いかに多くの時間が費された事だらう。隣りの職員室の方から、甲高に響いて來る時計の音を數へるともう十時です。彼の心は、すつかり疲れて了ひました。といつて、此の不愉快なにえきらない心持を、明日の朝まで持ち越すのは、尙更やりきれない事に思はれました。

「兎に角——」と、心に呟いて、彼はその二通の手紙を懐に入れて外へ出ました。町のポストへ行くまでにとちらかに決めようと思ひながら——。

町は大方寝しづまつて、凍つた土に下駄の音が高く響きました。彼は、とつおいつの歩みをゆつくりと運びました。右の足では「思ひ切らう」と決心し、左の足では、「いや！」と、その決心を打消

しながら――。

兎に角、彼は町の中程の橋の袂に立つてゐるポストの前に行きました。而して、兎に角、手紙を懐から出しました。が、勿論、未だ、そのどちらを出さうかが決りません。彼は、その二通の手紙を握つて、そこでまたしばらく立ちすくんでゐました。寒い風は、頬の肉を殺ぐやうにして、びゅうと吹いて來ます。向うの横町の方で犬がしきりに泣きます。いつまでも此様なところに、ぼんやり立つてゐる事は出来ません。彼は、自分の不決斷が、自分ながら腹立たしくなつて來ました。而して、その二通の手紙をやけくそに袂の中に投げ込んで、高く下駄の音を鳴らしながら、學校の方に戻りかけました。が、ものゝ十二三步を歩みかへした時、ある一つの考へが――考へといふよりも寧ろ衝動が、彼の心を衝き動かししました。彼は、再びポストの傍に戻ると、袂の中から手當り次第に一通をとり出し、眼をつむつて、その受口に投げ込みました。而して、あとの一通をば、矢張眼をつぶるやうにしてすたくくに引きちぎり、橋の欄干のところから無難作に投げ捨てました。紙片は、月光を捕へて、きらりと光りながら、泡立ち流れる溪流の中に散つてゆきました。彼はほつとしました。彼は、何よりも二三時間もの間の、とつおいつの苦しいジレンマから自由になり得た事が愉快でした。

「どうでもなるさ。」と、彼は、軽い心持になつて、高く口笛を鳴らしながら、學校の宿直室の方へ歸つて行きました。

Tは、今、N子の返事を受取つた瞬間に、それ丈の事を、はつきりと思ひ浮べました。勿論、その晩から今までの四日の間にも、その手紙の事を考へずにはありませんでした。いや、寧ろ考へづめに考へてゐたと云つてよい位でした。だが、その考へは頭を擡げるとすぐに、或る曖昧な奥の知れない感念のうちに吸ひ込まれて了つて、痛切に、心に迫つて來るものとはならず居りました。あの二通の手紙のうち、どちらか一通だけは、必ず彼女の手許に届けられてゐなければなりません。どちらの手紙が届いたのだらう？と思ふと、かすかに胸がふるへ出します。が、それ以上つきつめて考へようとすると、そのつきつめた心持が、妙にぼやけて了つて、そこに、へんてこな餘裕が生れて來る。つまり、その考への前に、彼の心は一種の不感状態をまもつて、一寸延びの安を偷むことに成功したのであります。が、今返事を手にすると、そのぼかされてゐた考へが――意識の底の底の方で、すかさず、あやされ、眠らせられてゐた何者かど、一揆のやうに、わつと一齊に群り起つて來ました。彼は、もう一度、ぐつと下腹に力を入れて、さてふるふる手先で封を

きりました。

二五九

例の鷲堂まがひのまづい文字が、或るものはおたまじやくしのやうに視線の端を滑つて消えました。或るものは、黒い小さな翅はしでもあるやうに、眼の中に躍り込んで來ました。彼の眼は、そのぎつしりと書かれた桃色の書簡箋の面を、二三度、慌だしく擦過した後、やうやく、その中ほどの二三行だけを讀みとる事が出來ました。彼の頭は、ぐらくとしました。

(一度、お目にかゝり度いと思ひますが、却つてお別れが致しくなりますから——)

次に、最後の二三行が眼にはひりました。

(あまりに深い御言葉、なか／＼にお恨みに思はれますけど、それは私のわがまゝで御座いませう。私は一生、あなたの事は忘れません。やさしい、男らしい方！ なつかしいあなたの記憶を胸に抱いて——)

彼は、あとは讀まないで、びり／＼とその手紙を引裂きました。而して、力一ばいストオプの中に叩き込んでしまひました。而して燃えるやうな眼で、ちつとその赤い炎を睨んでゐました。白い齒を出して、愛嬌深く、しかし、嘲るやうに笑ふ彼女の顔が、その炎の中にありました——。

ふと、彼は、自分にかへりました。今は、火曜日の第三時、地理の時間です。彼はたしか生徒に

向つて、何か話しかけてゐた筈です。若い先生の——可愛さうに、怜愍な戀人から工合よく、「左様なら」を告げられた若い先生の、そのむざんに打碎かれて我を忘れて了つた様子を、尋常五年の生徒達は、皆、呆氣にとられた顔をして、圓い眼を彗星のやうに光らせ乍ら、ちつと見てゐました。Tはそれに氣がつくと、はつとしました。而して顔を赤くしてどきまざとしました。と同時に、何と思つたか、いきなり、教壇の上に飛び上つて、號令をかけるやうな調子で云ひました。

「さあ、皆、本を藏くらふんだ。戶外そとへ出て雪合戦をやらう。女生の方は、中で勝手に遊んでゐろ！」

二

思ひがけない許しを得て、遊び盛りの子供等は、わつと歡呼の聲を擧げながら、帽子の上から襟巻で包んだり、外套を被つたり、それ／＼身仕度を堅め、我先にと、運動場の方へ飛び出しました。雪は、相變らず、ちら／＼と降りつゞけて居ります。

子供達は、東と西と二組に分れました。——やがて、雪合戦がはじまりました。

しゆう／＼とうなりをたて、縦横に飛び交ふ雪礫は、刻一刻に激しくなつて、そこら一面を、濛々とした吹雪で煙らせました。叫び乍ら、罵り乍ら、関の聲を擧げ乍ら、雪を蹴立て雪を浴びて

それ自身一つの雪礫になりながら、子供等は入り亂れて戦ひました。玉にするのが間に合はないで、掬つてはきかけるものもある、取組み合つて轉げてゐるものもある、遊びの領域を通り越した喧嘩面で、掴み合ひねち合つてゐるものもある――。

その混戦の中で、Tも夢中になつて、丸めては投げ、丸めては投げしました。彼は、その雪礫の一つ一つに力を込めて投げました――彼の裏切者の、狡猾な圓い眼を眼蒐けて。偽りの媚びを漂はす赤い唇を眼がけて。もう自分の事などは疾くに忘れて了つてゐるその白い胸を眼蒐けて。

彼は、唇を嚙んで、うん／＼と呻き乍ら、滅茶苦茶に投げました。而して、時々、聲に出して叫びさへしました。

「畜生！ 裏切者！」

先生が、先に立つての奮闘振りは、子供等の勇氣を百倍にしました。實際それは、敵に廻つた組は彼一人の爲めに浮足立つて來たほど、それほど猛烈な、怖ろしい奮闘振りでした。しまひには、彼は、敵味方の區別もなく、手當り次第にかゝつて行きました。はじめのうちは、遠慮してゐた子供等も、いつの間にかその挑戦につりこまれて、我も我もと、皆、彼に向つて來ました。――明らかに、或る群集心理が、彼等を支配したらしく見えました。わあ／＼と叫び乍ら、彼等は、彼一

人を眼がけて、四方八方から激しい雪礫を送りました。彼の、頭といはず、脊と云はず、頬といはず、眼といはず、冷たい痛いかたまりが、用捨なくぶつつかつて來ました。而して、子供等は、しまひには前後左右からとびかゝつて來ました。すると、益々狂暴な昂奮にかられて行つた彼は、それを片端から捻ぢ伏せ、刎ね飛ばしました。其の狂暴さが、子供等にも感染して行きました。彼等は、一齊に彼に飛び蒐つて、折重なつて、とう／＼、彼を雪の上に押し伏せて了ひました。

「止め、止め、もう止めるんだ！」彼は苦しい聲で、下の方から斯う叫びました。而して子供等のすこし手をゆるめたところを摺りぬけて、はう／＼の態で、廊下の中にかけ込みました。わあツと嘲るやうに叫ぶ子供等の聲が、あとから追ひかけて來ました。

「やあ、えらい元氣だな。」

雪だらけ、泥だらけの彼の様子を見ると、同僚のSは、かう云つてにや／＼と笑ひました。「は／＼／＼。」

彼は、自分でもびつくりする様な大きな聲で笑ひましたが、何だか、急に、眼のところが熱くなるやうな氣がしたので、こそ／＼と自分の教室に逃げ込みました。ぜい／＼と息をつきながら、そこに立つてゐましたが、

「まあ、先生！」

と、女の子に聲をかけられて、はじめて気がついて、身體についた雪をはたくと拂ひ落しました。而して、泥まみれになつた上着を脱がうとして、釦に手をかけましたが、すっかり凍えて了つて、指先が自由に動きません。

Tは、その、不安な、麻痺の感覚をいたはり乍ら、持つて行き場のない、赤く凍えた手をちつと見つめて居ました。やがて、その不感状態の底の方から、しく／＼と銀の針で刺すやうな疼みが來ました——と、同時に、その心にも、この四日間の不感状態の底から、かすかにかすかに、うづき出して來る疼みを感じられました。彼は、將にかたちづくられようとしつゝある或る新しい感情の、薄氣味の悪い前觸を感じながら、そつと、斯うつぶやきました。

「あゝ、とう／＼彼女は去つたのか？ ほんたうに去つて了つたのか？」

彼は、泣き出しさうな顔をして、双手を胸のところにはげたまゝ、ぼんやりと立つてゐました。

みじめな戀の話

(七年十二月作)

私に戀の話をしろと仰有るんですか。(と或る田舎新聞の記者をしてゐるSさんは、一寸顔を赧くして云つた。而してその赤くなつた顔を伏せて、下向に長く垂れた鬚の尖を前齒で噛み乍ら、暫くもぢく／＼と両手を揉み合せてゐたが、思ひ切つた様に顔をあげて) 宜しい、話させよう。今まで、こんな話は誰にもした事はありませんが、今夜はひとつ奮發して話させよう。大に話させよう。(Sさんは、ぼつり／＼と豆を噛むやうな調子で、凡そ次のやうな話をした。)

左様、あれは、私が東京へ出た次の年ですから、二十三の時です。私は、私の伯母の許で、美紗子といふ女と知り合ひになりました。

どんな風にして、美紗子と知るやうになつたか？ 私は、それをはつきりと思ひ出す事が出来ません。それは、何かの用事で、たしか三度目位の訪問を、氣遣ひな伯母の許に試みた時でした。伯母と對坐してとぎれがちな談話を續けてゐると、襖越に、

「御師匠様。」と呼ぶ聲がしました。華かな女の聲です。「私、今日一寸用事がありますから、またお伺ひ致しますわ。」

伯母は、活花の師匠をしてゐたのでした。

「まあ、いゝぢやありませんか。こゝへいらつしやいな。田舎の甥なのですよ、氣遣ひなお客様さんぢやありません。」と云ひ乍ら、伯母は立つて襖を明けかけました。

「でも、失禮ぢやなくて？」などと後の方から低聲の囁きが聞えました。衣摺の音など媚かしい若い女の氣配が、背中一ぱいをこそぐり廻すやうに感じられます。すべて、若い女といふものに對して、子供のやうなはにかみをもつてゐる私は、肩を突張らせて、二尺ばかり前の疊の上をちつと見つめてゐました。やがて、女は這入つて來ました。伯母は、簡単に私に引き合せて呉れました。無器用に下げた頭をひよいとあげた時、私は、俄にぼつと明るくなつた眼の前に、強い色彩が入り亂れてまばゆく渦巻くのを感じました。而してその瞬間、何といふ美しい女だらう！と思ひました。女は、打解けた晴れやかな調子で、伯母の言葉に附いて、いろ／＼話しかけましたが、私はもうただどきまぎして「えゝ。」「えゝ。」と、辛うじて返事が出来るだけでした。

それが美紗子でした。其日は、私はひどく何かに脅かされた氣持がして、逃げるやうに歸りましたが二度目に訪ねた時にも、丁度美紗子が來合せてゐました。而して伯母が何かの用で座を外したあとで、美紗子は、軽い、華やかな調子で、それからそれへと話しかけました。六かしい曲名などを並べて西洋音楽の話をして、

「貴方、何とかの何とかをお聴きになりました。随分宜しかつたさうですね。」などと問ひかけた。り、「今度のG—座には、是非御師匠様をお誘ひしようと思ひますの、御師匠様つたら、新しい芝居だといふと、御覽なさりもしないで、頭からくさしてお了ひなさるんですもの。ほ、ほ。——あなたも御一緒にいらつしやいな。」と云つたりしました。

すつかり壓倒されて了つた私は、矢張、碌々、返事も出来ませんでした。その日、私は妙にもだもだしいやうな、わけも無く躍り立つやうな、又何かしら不安なやうな、一種變挺な心持になつて伯母の家から歸りました。どんな顔であつたかは、どう思ひ返しても纏まつた印象となつて來ませんでしたが、何かの拍子に「ね」と云つて念を押すやうにした、その、深い大きな、活々と輝く一双眼文は、はつきりと思ひ浮べる事が出来ました。否、思ひ浮べる迄も無く、いつの間にか深く胸の底に刻み込まれて了つてゐたのに気がつきました。それからまた、その華やかな聲が、耳について離れませんでした。美紗子の聲は、その顔よりも更に美しかつたと思ひます。聲量の豊かな、メロディ、アスな、少し顫ひを帯びた、その中にあらゆる音階を皆含んでゐるやうな——而して、これは勿論あとになつて気がついた事ですが、美紗子は顔ばかりでなく、身體全體の表情の極めて複雑な女で、その身體の表情と、言葉の曲節との間に、非常に自然な微妙な調和がありました。たとへば、

彼女が一寸身體をくねらせる、ほんのかすかに首をかしげる、すると、それに應じたそれ／＼の曲節を以て、その身體一ぱいに充ちて居る豊かな聲が自分に溢れ出す——それは、丁度、身體全體が一種の精巧なデリケートな楽器でもあるかのやうでした。實際、私は、美紗子の話を聞いてゐると話の内容は兎も角、先づその聲に酔はされてしまふのでした。

それからといふものは、美紗子の華やかな聲が耳に沁みついて、離れませんでした。で、私は、二週間ばかりの後今度は何の用もないのに、思ひ切つて伯母を尋ねて見ました。伯母は今迄私があまり外々しくしてゐたのに腹を立てゝゐた位ですから、歡んで私を迎へて呉れました。その時は美紗子に逢へませんでした。その次もう一度訪ねた時、美紗子も折よく來合せてゐました。私は、襖越にその美しい聲を聴く丈でいゝと思つてゐたのですが、美紗子は、すぐに出て來て、

「あ、Sさん、暫くでしたね。」と馴々しく呼びかけました。もうすつかり友達づきあひなのです。而して、種々話をするのですが、私は、將棋の駒のやうに堅くなつて、唯もぢ／＼するばかりです。顔をあげてその美しい顔を見ようと思ひましたが、それさへ出来ません。

私がさうして、もぢ／＼してゐる間に、美紗子の方から、無邪氣な、大膽な、明けツ開きな態度で、すん／＼接近してまゐりました。これは、私には全く思ひ掛けない事なので、私はすつかり狼

狼してしまいました。美紗子は度々、はじめは伯母の用などにかこつけて、——私の許へ——私は、或る素人下宿にゐました——度々やつて來ました。而して、その賑かな聲を狭い室一ぱいに響かして歸りました。

「何といふお轉婆なんだろう？」私は、始末のつかない程掻き亂された心の中から、呻くやうに斯う呟くのでした。田舎から出たばかりの私には、都會そのものが既に強過ぎる刺戟です。その都會の結晶ともいひ度い様な、彼女の華やかな言葉、華やかな姿——私はすっかり壓倒されて了つて心の底から呻くのでした。「一體、こりやあ、どうした事なのだ？」

どうしたも斯うしたありません。私は、正しく彼女にまゐつて了つたのです。「無やみに男の許へ尋ねて來るなんて何といふお轉婆だ？」と罵つて見たりなどしても、實は、毎日のやうに彼女の來訪を待ち構へてゐるのです。而して一週間も彼女を見ないと、堪へ切れない心の饑ゑから、のそ／＼と伯母の家へ訪ねて行くのです。彼女の言葉や、表情の斷片は、夢の中にさへちらつて離れないのです。この踴躍と、この不安と、而してこのもだ／＼しさと、どうして是が戀で無いと云へませう。しかも、私は強情にそれを打消しました。「馬鹿な、おれは戀などの出來る人間ぢや無いのだ、戀では無い、唯、少しくあの少女にひきつけられたまでだ。」と、私は自分自身に辯解しまし

た。「少しくあの少女にひきつけられたまでだ。」——何といふ勿體らしい言葉でせう。私は實際、妙に老成振つた道學先生染みた顔附かなにかして、このとほりの言葉を、しかつめらしく繰返したものです。

どうでせう。「すこしくあの少女にひきつけられた」先生が、「彼の少女」の爲めに間もなく神経衰弱になりました。その時分、私は、或る雑誌社の仕事をしながらその餘暇に正則英語學校の夜學に通つて居ましたが、夜學の方はそんなわけで止めて了ひました。夜學の方で心易くなつたKといふ男がありました。尋ねて來て呉れるやうな友人は、この男だけでしたが、或日やつて來て、

「どうしたんだい？ 一體。そんな青い顔をして？」と、惡戯好きさうな、しほの辛い眼で、私の氣むつかしい顔をじろ／＼見るのです。其時、私は、「少しくあの少女に」式の、勿體振つた調子で、こんな風に答へたものです。

「どうも都會の刺戟は僕には強過ぎる。矢張、田舎がいゝね。僕は何だか非常に疲れた。」すると、Kもさる者です。鬚の濃い顔を撫でまはし乍ら、にや／＼と笑つて、

「都會の刺戟にも種々あるからな。僕はまた戀でもしてるのかと思つたよ。」

これには、私もぎよつとしました。而して、思はず顔を赧くし乍ら、憤つたやうに云ひました。

「馬鹿な事を？ 僕はそんな事は嫌ひだ。」

「嫌ひだ」は手厳しいね。成程、君は嫌ひかも知れないが——。」と、Kは相變らずにや／＼してゐましたが、私は、何だかひどく侮辱されたやうな気がして、非常に——磊落なKをも一寸たじろかせた程に——不機嫌になりました。Kが歸つてからも、私は、一人で、「そんな事は嫌ひだ。」と幾度も心に繰返しました。それから、しばらくの間、「そんな事は嫌ひだ」といふのが、私の口癖になりました。私の氣質には、この「そんな事は嫌ひだ」といふ言葉が、びつたりとはまつてゐたのです。私は、暗い眉の間に深い皺をよせ、口元を横の方へおしまげるやうにして、その言葉を口の中で繰返しました。時には口に出しても云ひました。下駄のさきが石に突當つたのにも、杖の端が自轉車にさはつたのにも、私は、さうして、この「そんな事は嫌ひだ」を繰返したものです。——今でも私には此の言葉が一番ふさはしいのですがね。(と、Sさんは、一寸考へ込むやうな風をした。)

私は、何よりも、自分が戀をしてゐるといふ意識を恥ぢ厭ひました。何故なれば、おれは戀などの出来るがらではない、といふ考へが、強く心の底に根を張つて居たからです。

これにはもう一つ話がある。話の中途ではありますが、私はこゝで、それをお話しなければなりません。それは、私の一種變態(へんた)な性格を説明し、それによつて、是迄の話にも、亦、是からの話に

も効果的な裏附をする事が出来ると思ひますから。(Sさんは、少し調子を變へて、人が遠い過去を追懐する時によくやる、あの、空を渡るやうな眼附をした。)

私は、十五の時に村の小學校を卒業すると、その年の夏に、試験を受けて、准教員の免状を貰ひ、近い村の小學校へ通勤しました。その村までは、凡そ二里弱の道程(みちのほ)がありました。町を過ぎつて、原に出、原から村、村から原といふ風に續いた路は、平坦ではありましたが、雨が降ると泥濘(ぬじ)を没するといふ様な、かなりの悪路(あくろ)でした。

しかし、私には路の遠いのはあまり苦にはなりませんでしたが、唯一つ、何よりも辛い事がありません。それは、途中で知つた人に逢ふ事です。知つた人に逢へば、何とか挨拶をしなければなりません。ところが、私にはそれが出来ない。

私は、人に逢ふと、それが何人であるに拘らず、その人に對して、何か非常に濟まない事をでもして居るやうに、顔が赧(か)くなつて、心があたふたとして、すべて意識が混亂して、見る事も言ふ事も出来なくなるといふ妙な性格を持つてゐました。それには少年時代の、初めて世の中に眼が向きかけた頃の、私の闊(くわ)した境遇——たとへば「坊ちゃん」といふ稱呼が、何時の間にか「巨さん」と變りしまひには「x屋の伴」などと蔭では云はれるやうになつて來た、さうした境遇も勿論影響したに違

ひありませんが、併し恐らく、それはもつて生れた私の性質でした。私は小さい頃から、非常に人見知りする子でした。大抵の子供は、例へば、お客などが来ると、ちよこくと其の前に出て行つてお辭儀をする、而して、「お、可愛い子、可愛い子」とか何とか云はれ、頭のひとつ位撫でられた上、お菓子などを掌の上のせて貰つて、いそぐとして戻つて来る——私の妹も、さういふ風な子でした。が、私にはそれが出来ません。襖の蔭の方で愚圖々々しながら、しれりくとした眼附で、指をくはへてそれを見てゐる心持——私は早くから、さういふわびしい悲しい心持に慣らされました。人が可厭なのでは無い、親しみ度い馴附き度いといふ慾望は十分にあるのですが、體の中か心の中に、妙にぎこち無い、身分でもどうにもならぬやうなものがあつて、それを拒むのです。こんな風で、私は、子供の時分から、つとめて人を避け、室に閉ぢ籠つて書に親むか、裏の山の叢の中などに潜り込んでぼんやりと物思ひに耽るかしてゐました。外へ出ても、なるべく人通りの少ない道を選んで歩き、たま／＼行き逢つた人には、顔をそむけて、態と知らぬ風をして通り過ぎました。「x屋のHさんは變人だ。」村の者は皆、さう云ひました。

さて、その學校までの二里の間に、私は一つの町と二つの部落とを通らねばなりません。町は村の内ですから、知つた顔も多い。殊に、その端れの橋の袂の處にはM屋といふ荒物屋があつ

て、その店先には、月に二三度は屹度私の家の上樞に鯨張つて、月賦の金の手厳しい催促をするいんごうな其店の主人が、置物の様に首を据ゑて居ました。そして、私の通るのをじろりと見るのです。私は、其處では、追ひ立てられたやうに、殊に、歩みを急がせるのですが、もう家を出る時から、それが苦になつてならないのです。で、ひどく氣分がこぢれた時などは、町の入口から引返して、二倍以上の大迂回をして、町の裏の小徑の方をそつと歩いて通りました。

町から野、その長い野の道を行き盡すと、そこからは、よその村になるのですが、毎日々々通ふ間には自然と顔馴染が出来る。それに對して、「お早う。」とか、「今日は。」とか聲をかけるのが、田舎ならば普通の習慣なのですが、私にはそれが出来ないのです。此方が通行人である以上、先づ此方から會釋しなければならぬのですが、私にはそれが出来ない。そればかりか、先方から、何とか挨拶をされてもそれに返事が出来ない。實際何といふ私は無調法者なのでしたらう。——今でも御覽の通りですが(と、Sさんは、一寸苦笑した。今日)と聲を掛ける人がある。此方でも同じやうに、「今日は。」といへばそれでいゝ。これ程簡単な事は凡そ世の中にならぬのですが、その簡単な事が、私には出来ないのです。部落へはひると、私は、ちつと爪先に腫を凝らして、機械のやうに歩行そのものゝやうになつて歩く。眼は、足もとより外——足もとに散つた石ころや、古草鞋や

乃至、足もとを掠めて毯のやうに轉げ過ぎる矮雞わいけいなどより外見てゐないのですが、極度に緊張し、過敏になつた私の神経は、周囲の物の氣配を、いやといふ程はつきりと受け入れる——而して、人が皆、自分の方を見つめてゐるやうかの様思はれ、少しく誇張して云へば、その視線を、その息吹を、身體のあらゆる部分に感じるのです。斯ういふ時、前方から足音がする。一間とは無い狭い道で、否でも應でも、行き逢はなければならぬと思ふと、私の胸はもう譯もなくあわて出し、私の全意識は總立になつて騒ぎ出す。顔は赤くなり、眼のさきはぼろとなり、耳はがん／＼と鳴るのです。幸ひ、黙つて行き過ぎて呉れ、ばい、が、

「お早う！」

とでも云はれようものなら、さあ大變です。私はその刹那、反射的に一寸無器用に頭を下げますがへどもどして言葉が出ない。「へどもどして言葉が出ない。」と云へば一口ですが、而してまた、實際それはほんの一瞬間の事なのですが、私はその一瞬間に、一時間も二時間も、否、寧ろ無限とも云ひ度い位の時間を経験したといつても、強ち誇張ではありません。云はうとして言へない、どんな風に言はうと考へてその言ひ方が見附からない。何でもいゝから早く云へ——と苛立つ心、二の足も踏む臆病な心、その臆病に對して憤る心があり、その憤りに對して、無調法な自分を嘆き

訴へる心があり、又、その嘆きに對して、憫れむ心、なだめる心、勵ます心もあれば、一方に、嘲る心、罵る心もある。——而してそれ等の一時に亂れ合ひ閃き合ふ光景の中に、私は私の全存在の苦しみを感じるのです。然うです。そのへどもどの一瞬間に、私の全生命の苦みがあつた——斯ういつても、強ち誇張にはなりません。實際、その時は、冷い汗が背中に滲み出すのでした。

「彼奴あ啞かい？」

「何時だつて、横の方をつん向いて通る。小なま意氣な——。」

私は、時々、こんな聞えよがしの罵倒を耳にしました。私の心は悲しげに呟く。「生意氣なのぢやない、これがおれの性分しやうぶんなのだ。おれにはそれが出来ないのだ！」

これではならぬ、と、自ら勵まして、思ひ切つて、聲を掛けて見た事もある。

「今日は！」

しかし、それは何といふ變挺へんていな聲でしたらう！ 自分でも、自分の聲とは思はれないやうな、怒つた様な、怒鳴りつけたやうな、妙に硬こばつた、尖つた聲なのです。相手は吃驚びっくりして、きよとんとした眼で私を見ます。その眼には、「おや、此の男が挨拶したよ！」と云つたやうな怪訝けげんの表情が浮びます。續いて「それがお前の挨拶なのかい？」とでもいふやうな、冷い嘲りの表情が漲ります。そ

れを見ると、私は、

「失敗つた、矢張云はなきやよかつた」と思ふ。而して、心が全然混乱して、眞赤になつた顔に、顔の筋肉が滅茶々に動くのが自分でよくわかる。その時の私の顔には、人が長い間隠してゐた汚行を見あらはされた刹那にする、あの強い羞恥と悔恨との混り合つた表情が浮んでゐたに違ひ無い。對手は、やがてくすつと笑つて、「やあ、今日は。」と、茶化した様に云ふか、或は、笑つた切りで返事をしないか、或はまた、私が挨拶しようとして、非常な決心を以て顔を振りあげた途端に、もうその妙な冷笑を浴びせかけるかしました。さういふ時、私は激しい——云ふに云はれない侮辱を感じて、くわつとなつて了ふ。而して、追ひ立てられるやうに足を速める。——臆病な癖に、いや、恐らく臆病なるが故に、私は妙な片意地と、鋭敏過ぎる自尊心を持つてゐました。ですから、斯ういふ侮辱感、私の心の髓にまで喰ひ込まずには居ませんでした。而して、私を滅茶々な反抗に導きました。私は、傲然と頭を立て、濶歩して見ました。「何とでも云へ、おれはおれの道を歩くのだ！」私は、狸のやうに心を甲ひましたが、その甲ひの下で、心は矢張おどく／＼とふるへて居ました。

部落を過ぎて、人目のない野の道にかゝると、私はほつと息をつきました。はりつめた心が弛む

と、私は悲しくなりました。

「世間の奴等は、みんなおれを悪んでゐる。而して、みんなしておれを苛めてゐる！」

どうかすると、この考へが胸一ぱいに漲つて、それが涙の粒に凝縮して、喉から溢れ出る事もありました。そんな時は、路の悪いのまだが、腹立たしく情無かつた！ 學生帽を被つて短い袴を穿いて、風呂敷包を抱へた少年は、夕闇の泥濘の中にイんで、その小さい魂の苦みから、一人でひそかに涙を溢したのです。私は、その當時を思ひ浮べると、自分ながら、すゞろに憐憫の情にうたれるのです。あゝ、何といふ不憫な少年でしたらう！

ですが、その時分はまだ幸福でした。その時分は、他を厭ふだけで、未だ自分自身を厭ひはしなかつたから。自分の姿を直視する事が出来なかつたばかりか、自分を華想化して、いろ／＼の夢を見る事を知つてゐましたから——。

寒い風が鼠色の薄闇を吹き縮らして、両側の桑畑の畝から畝へと轉がる乾反葉がかさこそと淋しい音を立てる——その單調な、長い、野中の道をこつ／＼と歩き乍ら、私はさまざまの夢を見ました。私は功名を夢見た、都會を夢見た。この世のあらゆる華やかなものを夢見ました。その夢の中には、何ものでも無いものはありませんでした。日は暮れて、逢ふ人は無い。初めてエレメントに

歸る事が出来た私は、打ちくつろいだ心に、恣な夢想を樂んだのです。そこには、蝕まれ乍らも、漸く甘美を加へ來らうとする青春が——戀がありました。さうです、世を憚り人を怖れる臆病な眼の片隅に、私は、ひそかに彼の家此の家の娘達の姿を映してゐたのです。勿論、片田舎のことです。から、ろくな娘はゐません。併し、朝夕の道筋に、私の心を惹いた娘が、すくなくとも三人はありました。三人の中でも、黒髪をめぐらした村端れの素封家の家の、閉ざされ勝ちの障子の影から、紫色の前掛などをほめかして、時々白い顔を見せる細面の眼の大きい娘が、一番私の氣に入りました。勿論、よくその顔を見た事も、言葉を聞いた事ありません——私は、その家の前を通る時は、一寸、たとへば一秒間の十分の一位の一瞥をその障子の内に投げ入れると同時に、躍り出す胸の動悸に追ひ立てられるやうに、殊さら歩みを早めました。——唯、その風情といふ様なものが、強く印象に残つて、何とも云へぬ物なつかしさを咬るのでした。

私は、私の王國で——その、一人きりの野中の道で、よく其の娘の事を思ひました。その娘の事を思ふと、一種のリズムが胸の底から湧いて、何か歌のやうなものが、唇に上つて來ては、言葉にならない悶々しさを感ぜさせるのでした。しかし、やがて、私はそれに言葉を與へました。私は其頃から詩を作る事をおぼえたのです。

私は、妙な自己流の詩を作つては、投書雑誌に投書する事を、始めました。——それが、私の文學への病み附きだつたのです——思ひ切つて、絢爛な、熱烈な詩を、むやみに、澤山作りました。で、その雑誌の投書家仲間でも、かなり持囃されるやうになりました。その詩が多く戀の詩で、その女主人公が彼の紫前掛の娘であつた事は云ふ迄ありません。本當に、私の空想の世界、詩の世界で、彼の娘が、どんなになつかしい言葉と、優しい情熱とを以て、私の孤獨な心を慰めて呉れたでせう！

私は、すつかりその娘の戀人になりました。私は私文の世界で、この上もなく親しい者として、始終彼女と共に歌ひました。しかし、私は、實際の彼女に對しては、殆ど最初に見かけた時以上の交渉を有ち得なかつたのです。彼女は、外の女達のやうには外へ出ませんでした。裁縫の稽古にでも通ふと見えて、留守の時の方が多い様でした。その上、私は偶々彼女を見かける事があつても、例の一秒の十分の一なのですから——。

こんな風にして、半年許り経ちました。

或る雨の降る日でした。私は學校からの歸り途に下駄の鼻緒を斷らして了つたので、裾を捲り上げて裸足になつて、びた／＼と深い泥濘を辿つて行きました。例の、黒板塀の家の前を通りかゝつ

た時、私ははつとしました。その娘が、外の娘と一本の傘の下に肩を寄せ合せながら、門の方へ出て来たのと、丁度門口の處で、ぴつたりと會つて了つたのです。私は、その娘を、そんなにまで近く見たのは、これまでに二三回しかありません。それに今日は自分ながら甚だみじめな様子をしてゐましたから、私はすつかり狼狽して、眞赤になつて了ひました。

「先生も、今日は大變だ！」その娘でない方が、嘲るやうに斯う云ひました。私は、逃げ足になり乍らも、本能的にちらと振り返つて見ました。すると、私の眼は、その娘の眼と眞直に合ひました。思ひがけなくもその娘の眼には、矢張一ぱいの嘲りが含まれてゐました。

「へえ、あれでも先生！」

その娘は大きな聲で斯う云つて、相手と顔を見合せて、高く笑ひました。

——その時の私の心持といつたらありません。

突き飛ばされたでもしたやうに駈け出した私は、二三町の間といふもの、どうして歩いて来たかを知りませんでした。正しく、その娘の笑つた、その高い笑ひ聲が、どこまでも何處までも追いつて来る——本當に、私は、その時何故、足下の土が眞二つに割けて、私の身體を呑んで了つて呉れないのかと思ひました。よし、此の地球の微塵に碎ける音であらうとも、あの時私の聞いた、その娘

の笑ひ聲ほど、私を驚かしはしなかつたでせう。

私は、それから後は、その家の前を通らぬやうにと、五六町の廻り道をする事に馴らされました。淋しい野の中の道は、矢張淋しい野の中の道でした。私の王國は奪はれ、私の夢は無慘に引裂かれて了ひました。——私はそれから、自分で自分の姿を顧みる事を覺えました。今迄漠然と胸に感じて居た、而して、恐らくそれが、私の病的な臆病に有力な一因をなしてゐた自分の醜さ、不恰好さといふ事に對する自覺が、その雨の日の出來事から、鼻緒の切れた下駄を提げて泥だらけになつて歩いて行くみじめな自分の姿から、而して、その娘の大きな眼の嘲りと高い笑ひ聲とから、次第に私の心の中にはつきりとなつて来たのでした。

さうだ、おれは肉體的にも醜い。肉體的にも、精神的にも、全體が、おれといふ存在其ものが、何とも云へない不恰好なものなのだ。それで、おれは人並に世の中に生きて行く事が出來ないのだ。何人からも嫌はれ疎じんられる——これが、おれの運命なのだ。勿論、おれのやうな男は、戀などをしてはいけないのだ——私は、その頃から、しみじみと、斯う思ひ初めました。而して、激しい自己嫌惡に陥りました。

お話すれば、未だいろ／＼の事がありますが、話が、あまり横道に反れ過ぎますから、此の位に

して置きませう。さて——(と、Sさんは、一寸言葉を切つて、調子をかへて、話をもとにもどした。)

それにも拘らず、私は、美紗子に逢ふと、何の用捨もなく、ぐいぐいと引きよせられて了つたのです。それほど、美紗子は魅力的であり、それほど、美紗子の誘惑は巧妙でありました。だが美紗子に見れば、唯接近して来たといふまで、謂はば交際好きな彼女の數多くの友達の一人に私を加へて——加へてやつたといふ丈の事の外に別に意味も無かつたかも知れません。彼女にとつては——少なくとも初めのうちは——唯、「交際」に過ぎなかつたかも知れません。しかし、斯ういふ男女の交際といふものに馴れない私は、「馬鹿な、そんな事はある筈は無い。」と打消し乍らも、彼女の私に對して言つた事爲た事を云つたり爲たりするそれ以上に——いや、それ以外に解釋しようとしませんでした。解釋しようとした丈で解釋し得たのでは無い。解釋の出来ない、謎の塊りみたやうなのが、それなりいくつも胸の中に抛り込まれる。最初はぶすくと燻つてゐましたが、しまひには、それが石炭のやうにかつかと燃え立ちはじめたのです。もう、どうにも斯うにも手がつけられせん。私は斯うして完全に、「戀をする人」になりました。この「戀をしてゐる」といふ自覺が、どんな

に私を苦しめたでせう。「馬鹿——貴様が戀をする、貴様がその恰好で戀をする、何といふ滑稽な事だ。」かう、私の心の中の別の一人は嘲笑ふのです。一方の一人は、それに對して、「いやすこしくあの少女にひきつけられたばかり」といふ例の辯解をもち出さうとするのですが、もう、今では自分ながら、それが餘り白々しいものに感じられて來ました。もう辯解する擬勢もなくなつてしまつて、「まあ、そんなに笑つて呉れるな、いちめて呉れるな——いまにどうにかなる。」と、一方が一方に哀願するのです。

かうして二つの心が闘つてゐる間に、その心とは全く無關係らしく思はれる、彼の根本的な本能的な甚だ無遠慮な熱望は、彼女に向つて燃え募つて行くのです。はじめは私は、彼女の前に、その熱望を押し殺して、平氣を装ふ事が出來ました。私は、その前の晩、一晚中彼女の事を考へ乍ら、床の上をころがりまはつてゐた翌くる日でも、彼女に逢ふと、全く興味のないやうな冷淡な態度を取る事が出來ました。私の性質は、その爲めに、たいした努力を要求しませんでした。

「Sさん、あなたは本當に張合のない方ねえ。私にばかりしゃべらせて置いて——あんた、聽いてもらつしやるの？」

或時は、美紗子は、話の途中で、こんな事を云ひました。

「え、聞いてゐるのですよ。聞いてゐるのですよ。」と、私は赤くなり乍ら、忙しく辯解するのです。

「私が、こんなに来てお邪魔？ 御迷惑？」などとも云ひました。

「いゝえ、そんな事はないのですよ。」

「何だか、御迷惑さうだつたわねえ。」

「いゝえ、そんな事はないのですよ。」私の胸の中の燄爐は、眞赤に燃えてゐるのですが、私の言葉は、矢張冷たい懶げなものでした。

だが、しまひには、それも出来なくなりました。私は次第に、悶々の情を、彼女の前に暴露して行きました。私は、無器用な言葉附で、その苦しい心持を、仄めかさうと試みた事も一再ではありませんでした。さういふ時、美紗子は鷹揚に微笑しながら、視線を外らして、全く別の事を話し出しました。一層魅力的な調子で、一層賑かな言葉附で――。

私はとうとう美紗子に手紙を書きました。勿論それ迄に幾度躊躇したか知りません。一つの心は嘲り、一つの心は恥づる。二つの心はたとへば次の様な問答を何度も繰返しました。

「戀文を書くのか、そのお前が？ 何といふ恥知らずだ！」

「まあ、そんなにいちめて呉れるな。おれは苦しくてたまらないのだ。」

「鏡の前に行け。而して、もう一度その醜い顔を映して見る。戀などをする面ぢや無いぞ。面ばかりぢやない、その全體の嗜好が、戀なんぞする柄ぢや無いぞ。」

「それは十分わかつて居る。けれども、おれの力ではどうにもならないのだ。まあ、暫く見のがして呉れ。そんなにいちめて呉れるな。――どうもしかたが無い。これは一つの運命だ！」かう一方の心は哀求するのです。

「運命？ 運命とはそんな滑稽なものなのか、馬鹿！」と一方の心は、思ひ切つて意地の悪い嘲笑を浴びせかけるのです。

が、とうとう私は手紙を書きました。一週間ばかりかゝつて、洋野紙に二枚ばかり書きました。それを投函してかへると、私は、晝間のうちから、蒲團を被つて寝て了ひました。もう世間に顔向けが出来ない、逆も、明るい日の中に、眼を見開いては居られない――といふやうな氣がしたのです。併し、さういふ心持の中で、今か今かと返事を待ちました。返事は呉れないかも知れない、呆れ返つて、腹を立て、彼女はもうこれきり私から去つて了ふかも知れない。それなら、それでいい。それで自分も助かるといふものだ――とも考へたりしました。

返事は來ませんでした。併し、返事よりも早く、美紗子自身がやつて來ました。いつもよりも一

層綺麗におつくりをして、一層晴れやかな顔をして——。私は、顔をあげて彼女を見る事が出来ませんでした。雨に濡れた雀のやうな恰好をして、所謂「穴にもはひり度いやうな」心持で、私は彼女の前に小さく坐つてゐました。手紙を書く時には、それでもといふ氣がしますし、一縷の望みもつながら居たのですが、斯うなつて見ると、全然、馬鹿な事をやつたとか考へられないのです。而して、只管に、それが悔いられ、恥ぢられるのです。彼女がそれに就いて云ひ出したら、直ぐに「いや、あれは、ほんの冗談ですよ。」と云つて、根も無い事に取消してすはう——咄嗟に、かう、私は、心を決めました。

ところが、美紗子は、矢張りいつもと同じ調子で、いつもと同じ様な話をはじめました。而していつもと同じやうに華やかに笑つて、その儘歸つて了ひました。私はほつとしました。しかし、そのまま宜かつたといふ安心と共に、非常な物足りなさ、もどかしさがあとに残りました。若しかしたら、美紗子はあの手紙を見無いかも知れない。あの手紙が途中で何人かに抑へられて、美紗子の手に渡らなかつたのかも知れ無い——斯うも思ひました。

その後、美紗子は前よりも一層頻繁に私のところへ訪ねて來ました。が、あの手紙の事に就いて全く、一語も言はないのです。私は思ひ切つて二度目の手紙を書きました。矢張返事はよこさせ

んでしたが、前の通り、返事より早く彼女自身がやつて來ました。併し、矢張、手紙に就いては全く何も知らないかのやうに、一語もそれに觸れ無いのです。

「あら、今日もまたこんなに長居して、御邪魔して済みませんでしたわね。左様なら、また。」ほんやりとした私の顔をあとに残して、ぱつと鳥が飛び去る様に、その日も彼女はそのまま歸つて了ひました。

私は、更に三度目の手紙を書きました。何と書いたか、忘れて了ひましたが、二度目のは最初のより三度目のは二度目のより、一層熱烈なものになつて行つたのは事實です。而して、三度目の手紙には、一種反抗的な心持から——私の胸の隅にいつでも白い眼を光らして、辛辣な嘲笑を浴びせかける一方の心に對しての、全く戀の奴隷となつて了つた一方の心の決死的な叛逆から——思ひ切つて露骨な訴へと、女々しい述懐とを書きつらねた事を記憶してゐます。今度こそは、と、私は思ひました。而して、すべてか然らずんば無かの期待を以て、一生懸命に彼女を待ちました。たしか私は、その手紙の末の方に、「この手紙は貴女をひどく困らせるかも知れない。しかし、貴女は、毫も参酌をなさる必要は無い。然か否か、はつきりと答へて下さい。而して、僕の心の苦しくてたまらぬ感情の鬱積に刷け口を與へて下さい。若し否ならば、御返事を下さるには及ばないから、此の

まゝ私から離れて下さい。私は恐らく再びあなたを見る事が出来ないであらうとの悲しい覺悟の上に、此の手紙を書く。」といふ意味の言葉を、大にセンチメンタルな調子で書き添へたと思ひます。ところが、彼女は、早速やつて來ました。いつもの様に無雑作な様子で、とん／＼と梯子段をあがつて來ました。かうして來る以上、多少の望みがある——斯う思つて、私の心は躍り立ちました。併し美紗子の顔附にも、態度にも少しもいつもと變つたところは見えないのです。

「随分お暑くなりましたわね。私、こんなに肥つてしまつて、今年の夏は何だか暑さうですわ。——この十五日にね、××館で私達の仲間の演奏會があるのよ。」こんな風に、彼女は話を初めました。いつもするやうに、窓際の壁に凭りかゝる様にして、柔かな身體の線を、青味がよつたネルの單衣の下にうねらせながら、目まぐるしい様に動く微妙な表情と共に、華やかな調子で語るのです。その時も、音樂の話をしたと思ひます。私は、「えゝ」とか「さうですね」とか、辛うじて氣の無い合槌を打つてゐました。

美紗子は、黒い豊かな髪をもつてゐました。が、後れ毛が多い方で、それが、額際に垂れかゝつて、眉からかけて、きれの長い眼の尻を掠める時、濃かな睫毛がちら／＼と揺れて、美しい瞳に非常に魅力的な情趣が添はりました。而して、一寸顔を横に向ける様にして、白い腕を露に見せて

ちよいとそれを掻きあげるのですが、その時の形には、通俗小説の口繪などに見るやうな趣がありました。話がはずむにつれて、此の動作が益々頻繁に繰返される。其の時も、度々それをやりました。私は、そのリズムミカルな動作を燃える眼で追ひ乍ら、追つても追つても追ひつく事の出来ないやうな、或るもどかしさに、じれ／＼して居ました。

今は云ひ出すか、今は云ひ出すかと、待ち構へても見ました。しかし、一向、云ひ出す様子もありません。私は、とう／＼堪まらなくなつて、此方から切り出さうと決心しました。「あの手紙を見て下さいましたか？」話の切目を窺つて、軽く、此の言葉を投げ入れて見よう。斯う考へた私は、その自然な機會を有たうが爲めに、出来るだけ、浮立つた調子で、受けこたへするやうに自ら強ひました。急に調子の變つた私の態度に、彼女は一寸驚かされた様にも見えましたが、彼女の話は、その爲めに一層弾んで來ました。

その言葉は幾度唇から離れかけたか知れませんが、へどもどと躊躇してゐるうちに、折角捕へた機會は去つて了ふのです。矢張、云はずに居よう——こんな弱い氣持も起つて來ます。これではならない、と私は思ひました。私は一生懸命になりました。

「ね、美紗子さん！」私は、衝動的に斯う呼びかけました。

「え、何？」と美紗子は、一寸顎をひいて、首を据ゑるやうにして私を正面から見ました。後れ毛の端を左の手の指先ゆびさきにからみつけて引つ張つてゐました。咲きたての花の様な半開きの唇は、ばかりと一つ瞬いた眼と呼應して、顔全體に笑ひを漲らす用意をしてゐました。その顔を見た時、私は「いけない！」と思ひました。「あなたの今、云はうとしていらつしやる事はわかつて居ます。けれども、あれは駄目よ。あの事なら云はない方がよくつてよ。」——美紗子のその刹那の表情は、かういつて居るやうに思はれたのです。激しい混亂の二三秒時がありました。「いえ何でも無いのですよ。かう云はうとする心を搔きのけるやうにして、

「あの手紙を見て下さいましたか？」

とう／＼私は云ひました。だが、それは何といふ不器用な言ひ方だ？ 喉の底から押しあげられたやうな重苦しい聲で、喘ぐやうな調子で——。

「拜見してよ。」

かういふ、はつきりした聲が私の耳に來ました。而して、同時に、私の眼には、微笑の波にたゞよはされた白い顔がぼんやりと映りました。私は、くわつと燃え上つたやうな顔を下に向けて了りました。

「本當でせうか。」と、彼女は云ひました。聰し氣な微笑を含んだ眼附が、ちらりと私の額際を掠めました。

「……………」私が答へようとして未だ答へないうちに、

「でも、私何だか——。本當で無いやうな氣がしてよ。あんまり突然なんですもの。」と、おしかぶせる様に言ひました。「それに私はこんなつまらない女ですもの。」

「そんな事は無いのです。本當です。」私は早口に云ひました。

「さうでせうか。」微笑を帯びた彼女の言葉は飽迄も落着いてゐました。「でも、何だか——。」と彼女は、一寸口籠つたが、急に華やかな笑ひ聲を立て、

「氣紛れなのよ。間違つてらつしやるのよ。——あとで後悔なさるわ。私は、そんな立派な女ぢやないんですもの。」と、美紗子は立てつゞけに云ひました。「ね、間違つてらつしやるのよ。氣紛れなのよ。あとになれば、それがお判りになりますわ。」

「氣紛れなんかぢやないんです。」私は怒つたやうな言葉附で、獨言のやうに斯う呟きました。しかし、美紗子は、一切を笑ひ消すやうに、華やかな聲を立て、笑ひました。

「私、實は御冗談だとばかり思つてゐましたの。だつて、あなたが心からあんな手紙をお書きにな

るとは思へませんもの。——ね。御冗談でせう。あなたは屹度小説でもお書きになるつもりで、あんな手紙をお書きになつたのだから。」

それ處ぢやない。私は躍起となつて何か云はうとしましたが、その刹那、強い、恥かしさの感情が胸の底から込みあげて來ました。

「さうです。冗談です。全く冗談です！ は、は、は、は。」私は斯ういつて急に笑ひ出しました。これ迄に決して笑つた事のない、一種の妙な笑ひが——自分乍らえたいのわからない不可思議な笑ひが——迸り出て、私の顔面筋肉を不隨意的にひきゆがめました。

「そら、ね、御冗談でせう。あなたは私を揶揄つていらつしやるのよ。ほんとに人が悪いわ。」と美紗子も一緒に笑ひました。笑ひやむと、美紗子は一寸眞面目になつて、

「私、ほんとに貴方を見さんか何かのやうに思つてゐるんですよ。こんなつまらない、御轉變な女ですけれど、あなたの妹にして下さいな。」と言ひました。何といふしをらしい謙遜な言葉でせう。併し、私は、彼女の眼に冷かな嘲りを、而してその全體の態度に、女王のやうな嘲りを見ました。——さうです、云ふ迄もなく、私はすっかり彼女に翻弄されたのです。(Sさんは、かう云つて苦笑した。而して、その時の心持が、今、胸に蘇りでもしたやうに、顔を赧くした。)

「ざまを見ろ！」と、あの意地の悪い一方の心が叫びました。「お前は何といふ道化者だ！ 何といふ立派な喜劇役者だ！」

さう云はれると、もうぐうの音も出ません。「さうだ、おれは本當に馬鹿だ。」かう嘆息するより外はありません。一方の心は、そこで益々圖に乗つて、激しい嘲笑を浴びせかけるのです。

「これは最初からわかり切つてゐた事ぢや無いか、お前がその顔で、その格好で、戀をするなんて——とりわけ、あの女に戀するなんて、これは初めから喜劇なのだ。第一、お前は、戀なんていふしやれた事をするがらぢや無いのだ。あの女の云つた通り、「儘かにそれは間違つてゐる！」あの利口な女が何といつたかを、よく覚えて居ろ！ 『あなたがあんな手紙をお書きになるとは思へませんもの！』あの女は然う云つたぞ。馬鹿！ 先づ自分を知れ！ 自分がどんな男かを考へて見ろ。しつかりしろ！ 恥知らずの道化者！」斯ういつて、益々意地悪く嘲笑するのです。

「さうだ。おれは本當に恥知らずの道化者に違ひ無い。」私の心は、力の無い溜息と共に斯う呟きました。

「斯ういふ結果を、俺は寧ろはつきりと豫想して居たと言へる。それなのに、何故、こんな馬鹿げた事をやつたのだらう？」

その時美紗子の眼にちらと浮んだ嘲りが、あの雨の日の田舎道で私の心を突き刺した。その娘の眼に浮んだ嘲りと、まったく、同じものであるのを思つて見た時、私ははづかしさの爲めに、全身がふるへました。背中につめたい汗が流れました。

私は、心から、この破戒を悔いました。「貴様は戀などしてはならぬ。」これが、私の、私自身に課した戒めであつた筈ではないか？

私は、美紗子に対する戀を抑制し否定する事に全力を挙げました。「見つともない、よせー」さういつて、きゝわけのない自分の心を叱りつけました。

ところが何うでせう！ 私の心は、どうしても、私のいふ事をきかないのです。狂妄な戀心は、私の自尊心をふみにじつて、只管に、美紗子へ、美紗子へと走つて行くのです。

それに、いけない事には、美紗子は相變らず、やつてまゐります。而して、前よりも一層親しげな、打解けた態度で、その横暴な魅力を恣にするのです。今はすっかり見え透いたそのコケツトイを憎みながらも、私の心は、わけもなく、深みへ深みへと溺れ込んで行きました。而して、もだもだしさに堪らなくなつて、喘ぐやうな眼を彼女に向けると、彼女はすぐに、「氣紛れなのよ。間違つてらつしやるのよ——。」といふ意味を、そのとりすましたやうな微笑で示すのです。それにつゝ

いて、例の嘲りの表情がかすかに動き出すのを見ると、私の心は、強烈な恥の意識の中に碎かれて了つて、もう、どうする事も出来ません。

私は、或る時、思ひ切つて斯ういひました。

「美紗子さん！ 僕はもう苦くてたまりません。後生ですから、僕から遠ざかつて下さい。僕はあなたからのがれ度いのですけれど、僕にはのがれる力が無い。あなたの方で、僕から遠ざかつて下さい！」

すると、美紗子は、さも思ひがけない事を聞くといふやうな顔附で、

「あら、何故なの？ 何故、そんな妙な事を仰有るの？」

「私は、苦しいのです、自分の心を抑へる事が出来ないのです。」

「そんな事仰有らないで、私を妹にして下さいな。私には兄弟はなし、ほんとにひとりぼつちなよ。——私がこんな御轉變なので、おいやなの！ 來ては御邪魔！」

「さういふわけではないのですが——。」

先づ斯う云つた調子なのです。

「何といふ馬鹿だ！ 何といふ滑稽な奴だ！」例の皮肉な奴が、私の心の中から、かう嘲ります。

「その格好で、その面で——？ 先づ鏡の前に行つて見ろ。さうして、その醜い顔を寫して見ろ。その醜い男が今戀をしてゐる。逝く水に數書くよりも果敢なきは——つていふ、王朝の貴公子のするやうな片戀をやつてゐる。何といふ滑稽だ！ 馬鹿！ 恥を知れ。」

一つの心は、こんな風に、毒々しい調子で繰返して、どつと意地の悪い哄笑を浴びせかけるのです。而して、そこに傷口の痛みに烙鐵を當てる様な、一種の快感を感じさせながら、益々圖にのつて、自分で自分を、極端に罵りはづかしめるのです。

「そんなに苛めて呉れるな。此の醜さと不格好さを捧げて、この苦しい戀をする。——これが俺の運命なのだ。」一つの心が斯う訴へる。而して、時とすると、突然に、涙などを臉におし出す。

「おや、泣いて居る。何だい？ このひよつとこが泣いてゐる——。」

一方の心は、激しく笑ひ出す。その笑が顔面神経にまで傳はると、顔が妙に歪んで、「泣き笑ひ」めいた一種珍妙な表情をする。

今考へてみると、誠に滑稽ですが、其頃の私にして見れば、實に慘澹たる苦みです。こんな風で神経衰弱は益々激しくなりました。連夜の不眠は、私の頬を尖らせ、私の皮膚を黒くさせ、私の眼をどんよりとした曇の中から異様に光らせました。私は何も彼も打ち捨て、病める獸のやうに、

四疊半の檻の中にのたうち廻つて居ました。

「まあ、神経衰弱なのよ。」と、美紗子は、わざとらしい驚きで、かう云ひました。「あんまり勉強なさり過ぎたのぢや無くて？ おからだは大事になさるなきやいけませんわ。」

後れ毛を搔き上げ、眉の根を寄せて、痛々しさに、私の顔を見ながら、

「御師匠様も心配してらしてよ。此頃些とも見えないがどうかしたんぢや無いか知らつて。——何處か温泉へでもいらつしやるといゝわ。そしたら私もまゐりますわ。」

斯うまで翻弄されて、それでも未だ腹を立てる事が出来ない。何といふ意氣地無さでせう。

前にお話したKといふ男は、私の爲めに、眞面目に心配して呉れました。勿論、私は、最初のうちは極力、戀をしてゐる事を隠してゐたのですが、此の男は相手の感じや神経には一向頓着の無い磊落さでどしどし私の秘密の中にはひつて來ました。最初の中は、それが不愉快で堪りませんでした。後には却て、すべての事を打明けて、頼り頼りしたいやうな心持になりました。が、さつの中に、非常にやさしい眞實なところを有つた男でしたから——。

「いよくほんものゝ戀わづらひかい？」こんな事をいつて、私をいやがらせもし、怒らせもしましたが、時々、私を引張り出して、酒を飲ませなどして、私の心を慰めようとして呉れました。自

分も戀をした事がある——こんな事を云つて、いろ／＼とすやうな事をも云つて聞かせたりしました。或晩の事です。Kはかなり酔が廻つたところで、

「一體あの女がどこがいゝんだ！」と突然に怒鳴り出しました。Kは二三度來合せて、美紗子の顔だけは知つてゐるのです。「何だい？ 女優の出來損ひ見たやうな御轉婆娘！ 彼の女のどこが一體お氣に召したんだい。あんな女は他にいくらも居るぢやあないか？」

私は、それが馬鹿に腹が立ちました。而して、

「そんな事はない！」と、強く云ひました。

「ひどいのばせやうだな。——だが、本當によく考へて見ろ。あの女の外に世の中に女が無いのぢやあるまいし。」

「駄目だ！ さういふ氣になれないから仕方がない。」

「仕方がない？ これが運命だといふんだらう？ 馬鹿！」どうした加減か、Kは酔に任せて、激しく私を罵倒しはじめました。而して、

「馬鹿！ 馬鹿！」と續けさまにどなりました。

どんなに罵られても、私は些とも腹が立ちません。

「さうだ。おれは馬鹿だ！ 馬鹿だ。馬鹿だ。」私は齒を喰ひしぼるやうにして、自分で自分を罵りました。すると、一種の何ともいへない快感が、言葉につれて湧き上りました。

「馬鹿！ 君は他人事のつもりでゐる。」Kは、私がいあまり熱心に相槌を打つので、一寸呆れたやうな顔をしました。

「はゝゝゝ。馬鹿！」私は、自分でも驚くやうな大きな聲で笑ひました。それがあまり突飛だつたので、Kは吃驚して私の顔を見ました。「こいつ、いよく／＼のばせて氣が觸れたな。」とでも思ふやうに——。だが、心配する事は無い。それは多分虐げられた私の自尊心が反抗的に自棄笑ひをやつたのだ。あの所謂「十字架上の笑ひ」といふやつを笑つたのだ。

ところが、斯ういふ状態にある私の前に、別に一人の女があらはれました。

私は、このどうにもしやうもない苦しい心持から、その時分から、ちよい／＼と教會の門を潜るやうになりました。自分といふものが、又、此の人間生活といふものが淺間しくてたまらなくなつた私は、戀などといふ事からは全く超越した、清淨な宗教的生活が慕はしくなつたのです。ほんの少し手足を動かす事にも、一寸物を思ふ事にも、堪へ難い醜惡が伴ふやうに思はれる瞬間を、殆ど

絶え間なしに感ずるやうになつた私は、噂に聞いたトラピストの修道院にでも行かうかなどと、眞面目に考へても見たものです。しめやかな薄明りの水のやうに湛へられた教會の空氣は、私の心に幾分かの効果齎らすやうに思はれました。あれでも、二月位は、熱心に教會通ひをやりましたらうか。聖書の教へが、臍氣ながら心に沁みかけた頃、私はしかし、こゝにも男女の情慾の息吹が濃やかに渦巻いてゐる事を知りました。氣がついて見れば、こゝは、他の場所よりも、一層放縱な男女の世界なのです。私はいやになりました。而して、もうこんな處へ來るのは止めようと思ひ始めた頃に、私はそのすゞ子を知つたのです。

私が置き忘れた本か何かを、すゞ子が拾つて置いて呉れた——何でもそんな事から、すゞ子と口を利くやうになつたのだと思ひます。その頃、私は始末に了へないほど陰鬱な、刺々しい人間になつて居たにも拘らず、一種の棄鉢の元氣といふやうなものから、妙には、しゃいだり、自由に奔放に物を言つたりする期間がありました。すゞ子との間に私がもち得たさういふ期間の二つ三つが、私とすゞ子とを親しくしたのです。

すゞ子は、矢張美紗子と同年の十九位でしたらう。美しさに於て、遠く美紗子には及びませんでした。而して、美紗子とは全く反對の型の女で、眼立たない質素な様子の中に、或るしをらしさを

もつた——手取早く云へば、いかにも教會に通ふにふさはしいやうな女でした。私の本來の趣味から云へば、美紗子のやうな女よりも、この方が好きな筈でした。しかし、すつかり美紗子にその心を吸収されて了つた私は、すゞ子に對して全く無感情でした。無感情といつては、うそになるかも知れませんが、兎に角、私が女といふものに對して、これ迄有ち慣はした羞恥——人並外れた病的な羞恥の情が、其時の私には、薩張動かなかつた事、而して、それが、すゞ子をして、私に近づく機會を作らせた事は、事實です。

「人間はいやだ！ 僕はつくづくさう思ひます。何だか知らないが、僕は何も彼も、いやで、いやで、しかたが無い。淺間しくてしやうが無い！」私は、額に深い皺を寄せて、投げ捨てるやうな調子で、こんな風に云ひました。「男があつたり、女があつたり、戀だの愛だのつて、實にくだらないうちやありませんか。」

「まあ、ちや、貴方は極端な厭世家なんですわね。」すゞ子は、やさしい驚きを見せて、いたはるやうに斯ういひました。或る種の若い女には、斯ういふ口吻が、一種のヒロイックなものに響くらしい、而して厭世家であるといふ事が直ちに、清高にして熱烈なる理想家を想はせるものらしい——といふ事は、勿論その時の私には氣付き得ようはありません。私の斯うしたいらくした、やけく

そじみた亂暴な言葉附や態度が、又は、いかにも苦惱者らしい憂鬱な表情が、思ひ掛けない反應を、彼女の心の中に起しつゝあるのを知つた時、私は少からずあわてました。——今思つて見れば彼女は、非常に空想的な、始終何者にか其の心を捧げずには居られぬといふやうな女なものでした。

「ですけれど、私、ほんたうの愛は、火のやうに人間の生活を焼き淨めるものだと思います。ほんたうの愛といふ事を、あなたお信じにならない？」

「それは信じた事は何も信じた事ではありません。けれども僕は駄目です。僕は生れ乍らにして、呪はれてゐるんです。」

「あら、そんな事を——。」とすゞ子は口籠る。いや、あの娘は本當にやさしい娘でした。子供の時に、父母を失つて、義兄の家で不自由勝ちに成長したとかいふ境遇のせりもあるでせう。その腺病質な、狭い胸の中に、直ぐに震へ出すデリケートな心臓を藏めてゐました。淋しい口元には始終母性的な微笑を湛へてゐました。だが、あの幼稚な感傷主義は、一寸私を閉口させました。殊に、私が曾て雑誌などへ出した詩——前にお話したあの野中の道で作つた——などを讀んでゐて、しかもよく覚えてゐて、それを持ち來されるには、實際少なからず閉口させられました。

「馬鹿々々しい、そんな——。」私は、よく顔を赧くしたものです。

こんな風で、私は彼女の友達になつて了ひました。しまひには、すゞ子も私の處へ、時々やつて來るやうになりました。

「Sさん、なか／＼隅へは置けない。一人も二人も、いゝ娘さんを引張つて來て。」と、宿のかみさんが冷評しましたが、實際、私としては、一種の艶福には相違なかつた。(と、Sさんは、また例の人の好ささうな苦笑を浮べ乍ら)尤も、美紗子は、その頃は、あまりやつて來なくなりました。流石に、私の様子を見るのが、氣の毒になつたと見えます。

かうなると、私もすゞ子に對して、全く無關心では居られなくなりました。すゞ子によつて、多少、慰められた事も事實ですし、「此の女なら——。」と、一寸思つて見た事も事實です。——しかし、私の心は、矢張、美紗子の方に、吸収されてゐました。ぎこちない、フレキシビリチイを缺いた身體の持主なる私は、同じやうに、ぎこちない、フレキシビリチイを缺いた心の持主でした。私のかたくなな心は、美紗子の事ばかり思ひつゞけて、苦悶し、嗟嘆し、轉機反側するより外ありませんでした。

美紗子の話には、音楽や演藝などの事が多かつたやうに思ひますが、すゞ子は、よく、その南の方の郷國の自然の中に過された少女期の追憶などを、感じ深い調子で語るのです。どうかすると

自分で自分の話の調子にひきこまれて、思ひ出の夢に、その睫毛の長い眼を、うつとりと酔はせるやうな事がある。そんな時、私は、だしぬけに、妙な呻き聲を挙げたりなどして、彼女の深い恍惚を破つて了ふ事がよくありました。

「此の人はまあ——」呆れたやうなすゞ子の眼がかう言ひました。而してその眼の中に怨みがましい表情がちらと動きました。

「一體、あの女は、何しにあんなに、おれの處によく来るんだらう。キリストの愛で、おれを救はうとしてるのか知らん？」などと、私はなげやりな心の中に、時々思つても見ました。一月許りの間といふもの、それほど、すゞ子は度々やつて来ました。私は、伏目勝なすゞ子の眼の中に、或る熱望と焦燥とを見ました——たしかに、見たと思ひました。「おや——？」と私は思ひましたが、次の刹那には、「馬鹿な！」と打消しました。「一體、貴様は甘く出来てるぞ。美紗子に翻弄されたのも、その甘さからだ。そんな甘い事で、厭世家もないものだ。——見ろ、その見つともない貴様の面を、その不格好な貴様の様子を、馬鹿！」と、私の心の中の、例の皮肉な奴は、頭から嘲り罵ります。これには、てもなく恥ぢ入つて、私は赤くなりました。

ところがどうでせう？

ばたりと来なくなつて半月目位の時、突然にすゞ子から、手紙が来ました。その手紙は、まぎれもない戀文なのです。それを讀んだ時の私の心持は、一寸説明が出来ません。が、種々に亂れ合ふ種々の心持を壓する一つの考へは、「彼女は間違つてゐる。」といふ事でした。思ひがけなく飛び込んて来た一羽の小鳥！しかし、この小鳥は戸惑ひしてゐる——斯ういふ考へでした。そこで私は、あたまから、すゞ子の戀を否定してしまひました。自分のやうな男がたとへ如何なる女からも戀などされるわけは無いのだ。自分は、自分でも愛想をつかさやうな、いやな、駄目な、下らない男なのだ。

あなたは間違つてゐる。僕は實に下らない男なのです——。かういふ意味の返事を私は彼女に書きました。思ひ入つたやうな熱した眼を矢のやうに射かける彼女の前で、口に出して云ひもしました。ところが、どうでせう。これは、たゞ彼女の熱した心を愈々煽り立てるのに役立つばかりでした。彼女はそんな事をいつて、私が彼女を敬遠するのだといふ風に取つたらしい。「變な事になつたもんだ！」私は呆然として、かうつぶやきました。

「捨てる神あれば、助くる神ありだね。大に慰むるに足るわけぢやないか。そりやあ、よかつた！」
 五は、例の無遠慮な調子で、私に、すべてを白状させた揚句、かう云つて笑ひました。

「助くる神か、馬鹿な！」私は、むつかしい顔をして苦笑しました。

「あれはなかくいゝ女だぜ。」と、一度位はすゞ子を見た事がある筈のKは云ひました。「彼方の方がいゝと思ふんなら、そりや惚れた慾目といふ奴だ。一つ試しに惚れかへて見ろ。ずつと此方がいぞ。彼方を止めて此方にする。それでいゝんだ。こんな簡單明瞭な事はない。」

「さう行くものか。君なんかや判らん。」私はKが、二人の女を物品か何かの様に云ふのが妙に癪にさはつて、怒氣をさへ含んでかう云ひました。

「戀の神祕とでも言ふのかい？ つまり、例の運命といふ奴なのだな。」Kは調子づいた笑ひ方をし、て、「運命といふものは、残酷なものだな、拵へないでもいゝ失戀者を二人拵へるんだからな。失戀を以て失戀を償ふ——か。つまり、別に一人の女を失戀させる事によつて、君自身の失戀の苦みを償ふといふわけかい。」Kは、益々調子づいてかう云ひました。その頃では、私があまり偏屈なのでKも少々愛想をつかして來た様子でした。

「馬鹿な！」と私は怒鳴りました。而して、心の中で、「おれに失戀する？ そんなみじめな女がこの世の中にあつてたまるものか。彼女は矢張、間違つてゐるんだ。」と思ひました。

「ちや、同病相憐れむの格で、失戀失戀を憐れむ事にするさ。これが人生の經濟といふものだよ。」

これで青春の浪費を省けるつてものだ。」

「……………」出來損なひの警句めいたKの言葉に、私はむつととして押黙りましたが心の中で、

「それがいやなのだ……」と怒鳴りました。丁度その日の午前、私は町で美紗子と會ひました。美紗子は私の姿をみつけると、走りよつて、例の華やかな笑ひで話しかけました。「この間御一緒に歩いていらしたあの可愛い娘さんどなたなの？ 新しいお友達が出來て、私はもうすっかり御見限りね。」と、美紗子は云ひましたが、私は、その表情のうち、或る侮蔑を見ました。たとへば、「あなたには、あの女位が丁度なのよ。」とでも云ふやうな——。私は、その事を思ひ出して、非常な恥の感じに、身内をくわつとさせられました。

「ね、S君——。」Kが何かいほうとするのをおしかおせるやうに、

「そんな事はいやだ！」と、私はとう／＼口に出して怒鳴りました。もし彼女が本當に自分に戀してゐるとする、而して自分も彼女によつて、美紗子に失はれたものを償はうとしてゐる、とするならば、——それこそ堪まらない！ と私は思ひました。しかも、自分の心に、さういふ心持の動きがないでもないと考へた時、私の内に潜んでゐる、妙な、片意地な自尊心が、猛然として首を掻けて來ました。あの美紗子の嘲りを含んだ眼の前で、あの侮蔑の前で、自分と此の女——恐らく、美

紗子が十分優越感を以て見下し得る此の女と結び付く——そんな恥知らずな事がどうして出来る。その瞬間、私は自分をその無恥に導かうとするすゞ子に對して一種の憎みを感じないでは居られませんでした。

しかし、次の瞬間に、その考へは、全然、ひっくりかへされる。

「あれは本當ではない、すゞ子は間違つてゐるのだ。あのかあい、小鳥は戸惑ひしてゐるのだ。おれのやうな男が、いかなる女からも本當に戀ひされるわけがない、本當に戀されてゐると考へるの、矢張、おれが甘いのだ。思つても見るが、その面^{おもて}で、その不格好さで。恥知らず——」こんな風に、私の心の中にははげしい卑屈心と、強い自尊心とが、亂れ合つて闘ひました。しかし、この自尊もこの卑屈も、私にとつては要するに同じ一つのものなのでした。

いや、今思ひかへして見ますと、私は何といふ、融通のつかぬ心のもちぬしてしたらう、何といふ片意地な人間でしたらう。私は、此の片意地は、私のもつた不格好さから出たのだと思ひますが、或は、反對に私の不格好さが、この片意地から出たのかも知れません。

とにかく、始終、自分の不格好さ醜さに脅かされてゐる私は、美紗子に戀を斥けられたのを當然と思ふと同時に、すゞ子の戀を、本當のものと思ふことが出来ませんでした。全然、間違つてゐる

としか思へませんでした。

而して、ついうつかりとしてすゞ子の方へ向いて行かうとする心を自分の心に見た時、私は冷酷にそれをはねのけて了ひました。

「間違つていらつしやるのよ。氣紛れなのよ。」と、美紗子は、私に言ひました。その同じ言葉を鵞返しに私はすゞ子に投げ與へました。すゞ子は、次第に熱して來ました。女ですから、殊におとなしい女ですから、會へば何も云へないのですが、その恥を包む勇氣で赤らんだ顔に、大きく見開かれ乍ら燃え揺れる二つの眼には、縋り訴へるやうな、恨み憤るやうな心持が、次第に露^{あせ}はに見てとられて來ました。

「わたし、もう、あなたには、お眼にかゝるまいと思ひましたけれど——」などとも、云ひました。

さうした眼、さうした言葉、それを眼の前に、見聞しながら、私には、どうしてもそれが自分を對象としてゐるのだ、とは信じ切れないのです。實際、變挺な状態といつたらありません。(とささんは、言葉を切つて、一寸何か考へ込むやうな風をした)が、間もなく大團圓がやつて來ました。怠屈でも、もう少し辛抱して聞いて下さい。此の愚にもつかない長話も、もうすぐおしまひになりますから。

美紗子！ 美紗子！ 忘れ難く、戀しいのは美紗子でした。はじめは、美紗子の遠さかつてゐるのを喜んでゐた私も、とう／＼堪へられなくなつて、伯母の家を尋ねて見ました。美紗子は、生花の代稽古などをやつて、伯母の家を、自分の家同様にしてゐましたから、伯母の家へさへ行けば、屹度、美紗子に逢へるのです。

眼の前で大きな花がばつと開いた様な、相變らずの華やかさ明るさで、久振の美紗子の顔が私の前にありました。

「あら、Sさん、暫くでしたわねえ。どう、もう頭の工合はお宜しくつて？」

「え、どうも——」私は、美紗子の前に出ると、直ぐに壓倒されて了ふ心を、自ら憎みました。此の意氣地もなくへどもどする心、瘦犬のやうに喘ぎ求むる心を、憎むと共に、又卑しみました。

「私ね、Sさん、もしかしたら横濱の方へ行つて了ふかも知れなくてよ。彼方へ行つても、今迄通りに親しくして下さいな。」美紗子は、はしやいだ調子でこんな事を言ひました。よく聞いて見るとそれはつまり、結婚するといふ事なのでした。結婚といふ言葉を耳にした刹那、激しいショックを感じた事は事實です。しかし、私はいして驚きも失望もしはしませんでした。それどころか、「ああ、やつとこれで解放された！」といふ氣がしました。だが、強い腹立たしさは、續いて腹の底か

らこみ上げて來ました。結婚するといふ事に對してではありません。こんな風にして、自分の結婚の事を私に語る彼女の、あまりといへば人の感情をふみつけたやり方が腹が立つたのです。——いや、さうぢやない。そんなにまで踏附ふみつけにされ乍らも、矢張彼女に對して本當に腹を立てる事の出来ない、自分の意氣地の無さに腹を立てたのです。

その日、歸り途中で、私は行き當りばつたり或るレストランへ飛び込みました。而して酒を飲みました。私は、美紗子といふ女を見てから、此の液體の胸にしみ込む快さを知りはじめたのです。私は幾つもの盃グラスを前に並べました。美紗子、美紗子、あの女もとう／＼去つて了ふのか？ 唯あの女の顔を見てゐる丈でも、あの女と口を利く丈でも、おれは慥かに幸福だつたのに——だが、もう何もかもおしまひだ。考へて見れば、何といふ感情の浪費だつたらう！ こんな考へと共に、しみ／＼とした哀感が水のやうに私の胸をひたして來ました。私の青褪めた頬には——私は酔つても赤くならない方でした——涙が流れました。

酔ふと、妙に感傷的になるのが、私の癖でした。ふら／＼と宿に歸つた私は、机の前にごろりと寝てまじ／＼と天井を見ながら、いろ／＼の物思ひに耽つてゐました。そこへすゞ子が來ました。

私のいつもに似ない、その日の感傷的な調子が、幾分か、すゞ子の感情を自由にしたらしく見え

ました。

「駄目ですわね。人間の思ひなどは、何の力もないものですわね。どんなにしても、矢張通らない思ひは通らないのですわね。」すゞ子は、私の方に横顔を見せて、何氣ない調子で、併し震へを帯びた聲で、靜かに斯う云ひました。その言葉は、極めて素直に、私の胸に流れ込みました。

「さうですね。」私は、危くかう云つて了ふところでした。

「思ひ切つて了はうと思つても、もうお伺ひもしまい、手紙もさしあげまい、と思つても。」すゞ子は、恥を帯びた微笑を、ちらと私の方に投げかけて、「自分で、自分の心がどうにもならないのですもの。」と云ひました。

自分で自分の心が、どうにもならない、本當にさうだ、——と、私は思ひました。自分の云ひ度い事をすゞ子が云つて呉れるのでした。私の悲しい眼が、すゞ子の涙ぐんだ眼と會つた時に、私はすゞ子との間に強い一致を感じました。私の自らあはれむ心は、やがて、自分の前に狭い胸をふるはしてゐる一人の女をあはれむ心と別ち難いものとなりました。やさしく、女を抱きとつてやり度いやうな、而して一緒に泣き度いやうな、一種の強い感情が私の胸の中に湧き上りました。

そこで、さうすれば——彼女を、自分の胸に抱きとつてやれば、それで宜かつたのだ。それで私

は救はれたのだ。何故といふに、私の衷心には、彼女を求める心が、その時はげしく動き出してゐたのに違ひないのだから。——ところが、次の瞬間に、より強い狂暴な滅茶苦茶な感情が、すつかり私を支配して了ひました。

「止せ、見つともない！」私は、心の中で、かう叫びました。それは、女に向つて叫んだのか、自分自身に向つて叫んだのか、よくわかりませんでした。が、私は、もう一度かう心で叫びました。

「止せ、見つともない！」

而して、私は、すゞ子が、いや、何人にせよ、こゝに一人の人間が、誇りもなく、張もなく、唯打萎れてゐる姿を見ると、無闇に心が苛立つて來ました。堪らなく、堪らなく、苛立つて、來ました。しまひには、それを抑へつける事が出來なくなつて來ました。私は、私の心の中に、自分ながら氣味の悪いほどのはげしい嵐を感じました。

「すゞ子さん！」私は、立上つて、兩手を後頭部に組合せて窓の方へ二三歩歩き乍ら、「貴女が私の事を思つて下さる——それは恐らく本當の心の動き方ぢやありません。たしかに氣紛れです。氣紛れでないとするれば、それはつまり事ですよ！ つまらない事だから斷然およしなさいと僕は云ふのです。何故と云へば。」私は、思ひ切つた無遠慮な調子でかう云ひました。「今までお話しなかつ

だが、僕には戀した——いや、惚れた女があるんです。命がけて惚れた女があるのです！」

すゞ子の顔は、眞赤になりました。而して氣の毒なほど、混亂した表情が現はれました。私は、それを一種の慘酷な興味で、打戾りながら、

「僕はあなたを可愛くないとは思ひません、けれども、その女の前では、あなたなんか較べものにならないのです。あなたがどんなに私を思つて下すつたところで——假りに、それが、本當だとしたところで、要するに駄目ですよ。駄目だから、およしなさいといふのです。第一、見つともないから……。」

「……。」すゞ子は怨めしさうに、涙を一ぱい溜めた眼で、私の顔を見ました。細い肩は——可哀さうにわな／＼とふるへておりました。

「は／＼。」私は、狂氣じみた、笑ひ方をしました。言葉が言葉を追驅けて出ました。私は一と息に言つて退けました。

「ところがね、僕は失戀してゐるんです。僕は死ぬほど、その女に惚れてゐるのですが、女の方ちや唾もひつかけちやくれなひのです。その女が女王で、僕は奴隸なんだ。而して、その女は、今嫁に行かうとしてゐるんですが、それでも僕はその女が思ひ切れさうもないのです。僕は、さういふ

意氣地のない男なんだ。ね、すゞ子さん、そんな男の事を思ふなんて、それはあなたが、自ら恥かしめるといふものぢやありませんか。——第一、先方せんぱうで心が動かないものを、此方で思ふなんてそんな不見識なことがあるもんぢやない。見つともないぢやありませんか。僕はこんな下らない、駄目な人間だが、あなたは立派な一人の女だ。さうまで、自らはづかしめる必要はないぢやありませんか。は／＼。」

その變挺な笑ひと一緒に、私の眼からは涙が落ちました。すゞ子は、そこへ俯伏うつぶたしてしまいました。その小刻みにゆれる襟脚のところに眼をやり乍ら、私は、愛憐と憎惡との奇怪な混合を、その胸に感じました。

「は／＼。わかりましたね。私は、あなたの爲めに、云つたのです。ね、つまらない事だからおよしなさい。」

すゞ子は首をあげました。而して涙の乾いたあとの、きら／＼と輝くやうな眼で、私の顔を見ながら何か云ひ度さうにしましたが、(Sさんは、こゝで一寸言葉を切つて。)

——丁寧に御辭儀を一つして、何とも云はずに歸つてしまひました。——これで、私の話はおしまひです。

それから？ すゞ子の事ですか？

勿論、それきり来もせず、手紙もよこしませんでした。美紗子は、間もなく横濱の方へ嫁に行きました。その後でも、私はかなり長い間、美紗子の事が忘れられませんでしたが。しかし、今では、すゞ子の事の方がより忘れ難い印象となつてゐます。

私が、美紗子に戀したのも間違ひですし、すゞ子が私に戀したのもたしかに間違ひでしたらう。すゞ子は彼女の、空想的な性情から、妙な幻影を、私の上におしかぶせて居たに違ひありません。いや、間違といへば、人間萬事皆間違ひならざるはなしですからね。第一、私のやうな人間は、生れて来たその事が一つの大きな間違ひぢやないでせうか。——だが、間違ひにもしろ、私は何故、あの時、すゞ子の愛を素直に受け容れなかつたらうと、それが、今でも残念でたまりません。あの女は本當にいゝ女でした。たしかに眞剣な戀の出来る女でした。もしさうしたら、私も、いくら、醜く、無格好に生れついたとしたところで、此の年まで、全く、一人の女をも知らずに過すといふやうなみじめな身の上ではかりもなかつたでせうがね。此の年まで——いや、私も、いつの間にか年をとつて了つたものです。年の効で、頭もこんなにつる／＼になりかけるし、心持も、大分丸くなりませんが、あの時分はどうして——。

と、(Sさんは、人の好い微笑を浮かべながら嘆息した。)

—了—

み、よか、割、合、好、い、わ、い

名、詞、動、詞、の、文、言、平、た

彼女のも「興味、定、め、あ、つ、た、こ、と、ぢ、や

よくわかるやうな、ま、よ、う、な、

気がする、
け、思、ひ、を、お、し、か、ぶ、つ、て、居、た、に、違、ひ、あ、り、ま、せ、ん、

だか、
け、思、ひ、を、お、し、か、ぶ、つ、て、居、た、に、違、ひ、あ、り、ま、せ、ん、

興味、
け、思、ひ、を、お、し、か、ぶ、つ、て、居、た、に、違、ひ、あ、り、ま、せ、ん、

みじめな戀の証

三一五

大正八年十月一日印刷
大正八年十月廿日發行

(定價金壹圓五拾錢)

著者

加藤 武雄

發行者

佐藤 義亮

東京市牛込區矢來町三番地

「愁 郷」

發行所

新潮社

電話番町(四)八八〇九九番
掛替東京一七四二番

印刷所

東京市神田宮本町五
電話下谷四〇六七番

(印刷者)

新潮社印刷部
高橋治一

□は長篇也、送料は凡そ一圓以上は十二錢、以下は八錢也

■夜の光	志賀直哉 一巻	■世の中へ	加能作次郎 一巻
■傀儡師	芥川龍之介 一巻	■郷愁	加藤武雄 一巻
■羅生門	同 一巻	■樂園の外	舟木重信 一巻
■心の王國	菊池寛 一巻	■地	上島田清次郎 一巻
■痴人の愛	久米正雄 一巻	■受難者	江馬修 一巻
■學生時代	同 一巻	■暗礁	同 一巻
■蘇生	豊島與志雄 一巻	□不滅の像	あこがれ 同 一巻
■我	(傑作選集) 里見淳 一巻	□同第二	彷徨 同 一巻
■新しい地	藤森成吉 一巻	□田園の憂鬱	佐藤春夫 一巻
■明るみへ	廣津和郎 一巻	□二人の不幸者	廣津和郎 一巻
■寂しき道	江馬修 一巻	□荊棘の路	相馬泰三 一巻
■憧憬	相馬泰三 一巻	□結婚期	谷崎精二 一巻
■子をつれて	葛西善藏 一巻	□史劇	項羽と劉邦 長與善郎 一巻

Handwritten notes in the left margin, including the characters '同' and '一巻'.

Handwritten notes at the bottom of the page, including the characters '同' and '一巻'.

終